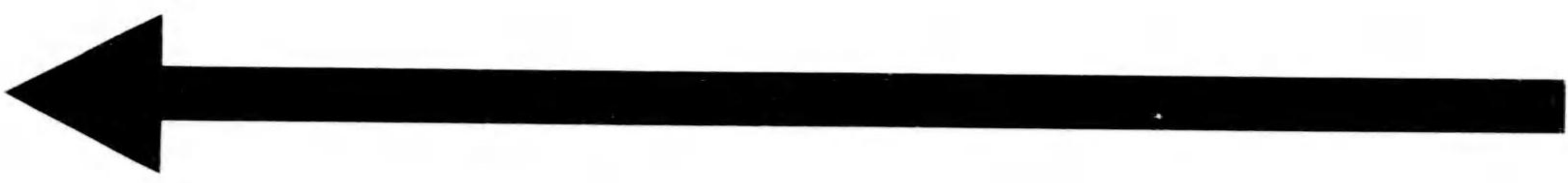


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始

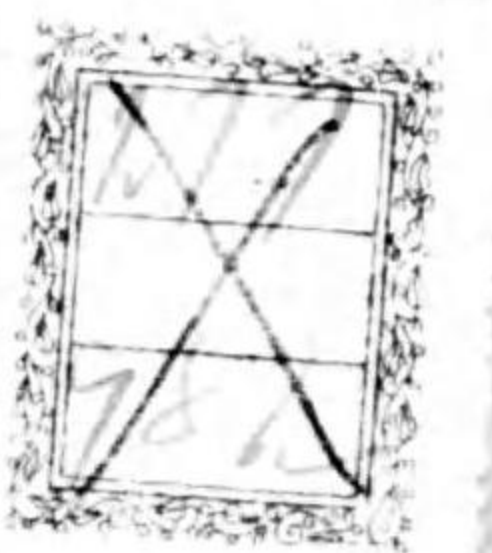


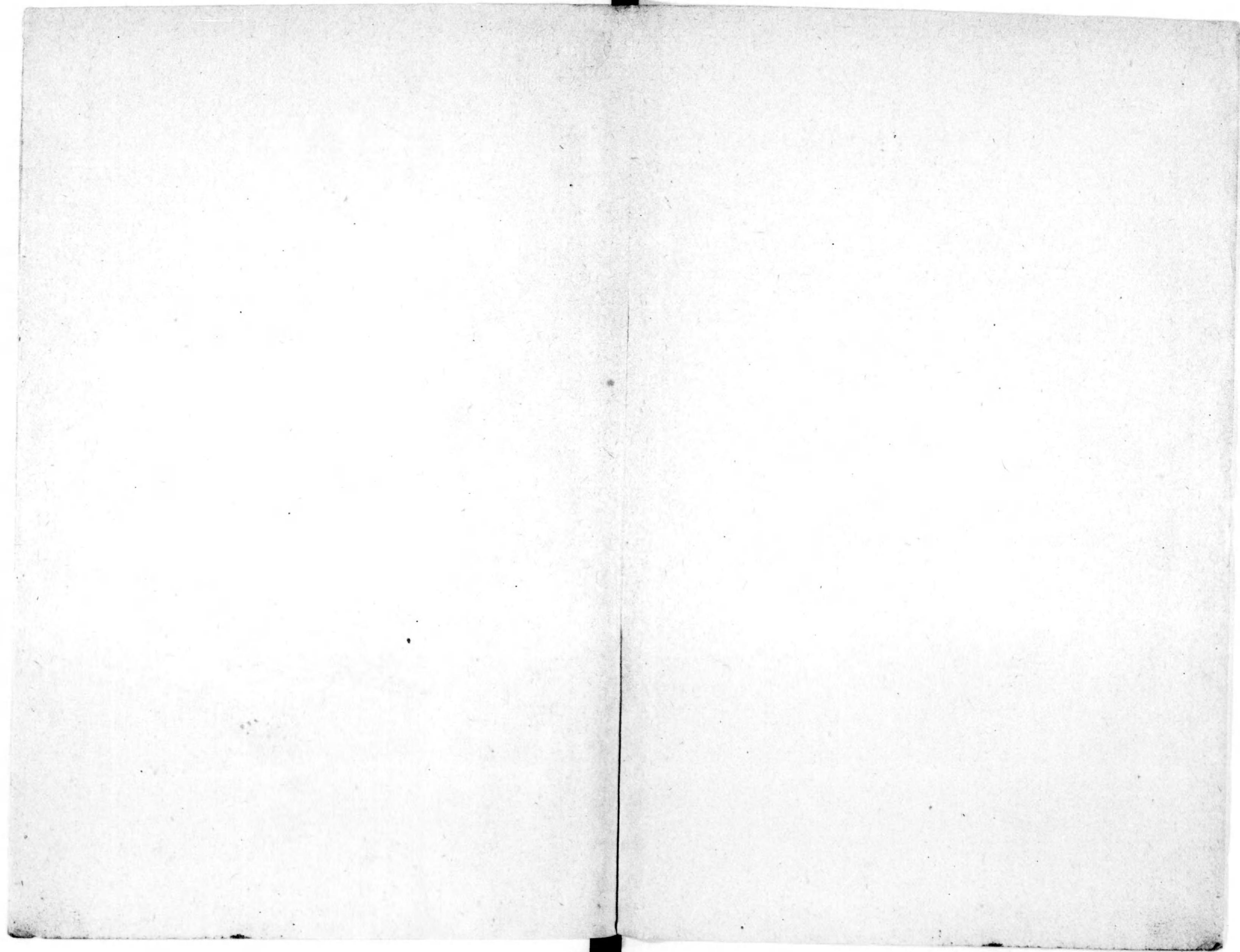
浮世亭夢丸講演

歌川珖舟畫

五遁の勇士大活動

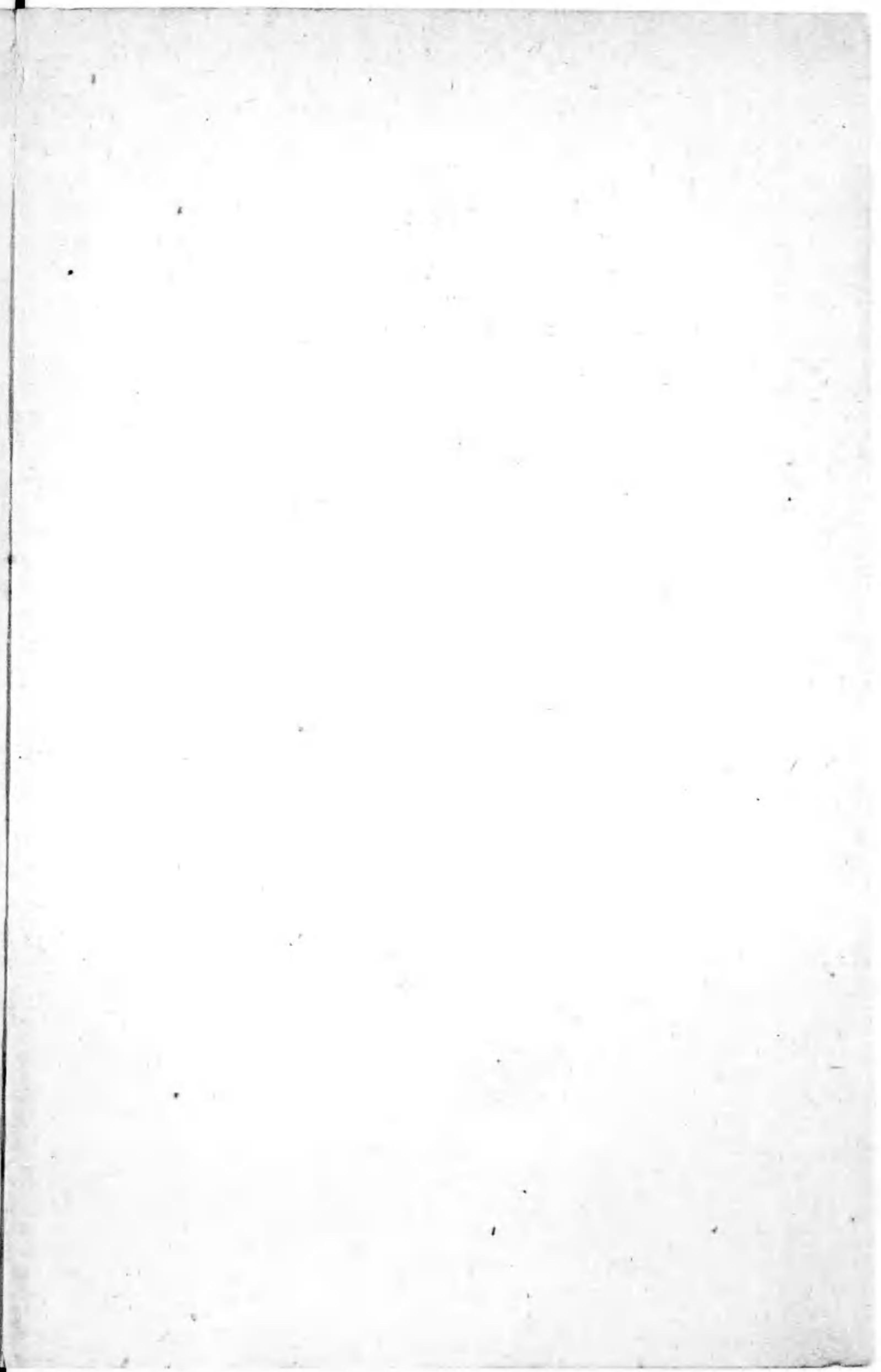
大阪 樋口隆文館發行







珠舟
珠舟





珠母



五遁の勇士大活動

第一席

浮世亭夢丸講演
隆文館編輯部速記

大正
6. 10. 12
内交

急いで駿府まで参り剛右此處まで來れば大丈夫でございませう、

を伺ふ、剛右衛門道照は、松並木より大勢の雲助を後に道を

いふところでお預りに相成つて居ります、

の間に於て若い旅人の危難を救ひ、駿府をさして道を急いだと

一一人にして火遁の術の名人高橋剛右衛門道照が島田と藤枝驛と

エー引き續き御機嫌を伺ひます、

第二篇に於ては五遁の勇士の



それでは是れにて御免と旅人に別れやうといたしますと旅人の爲めには命の恩人でございます旅人私には此駿府の小間物屋十兵衛の悴十助と申すもの、是非ともお立寄り願ひたいと強ての頼みに剛右衛門も厭み兼ね剛右ソレでは親御に御挨拶だけいたさうと甲州を連れて立ち寄ることに相成つた、此小間物屋十兵衛といふのは呉服丁に住居してゐる相當の資産家でござります、悴の十助を遠州濱松まで掛取に遣つたのであるが其戻り道で胡麻の蠅に尾けられ、金を奪られるか命を取られるか、何方か二に一つは脱れまいといふ處へ此人が飛び込んで来て命も金も無事に助けて下さつたのだと聞いて一家の悦びは一ト方でもなく、酒よ肴と待遇した上十兵衛當地にはお知合でもございますので剛右いや、當地には誰も知人はござらぬ十兵衛それでは是非共私方に御逗留を願ひます、御仕官でござりますならお武家で存じのお方もございますから、お紹介せも仕りませうと

いふので剛右衛門も渡りに舟でござります剛右では遠慮なく御厄介に相成ると、甲州諸共足を止め、一日二日と暮す内に或日のこととてござります、甲州が走り戻つて甲州頭、頭、剛右モ一頭なぞといふて呉れるな、外聞の悪い甲州ソレちや旦那、親方、親分剛右三つも云はなくても好い、一つで澤山ちや甲州ソレちや親方は何うです剛右何でも好い、何うしたのだ甲州何うのこのと云つて今大變な奴を見つけたんで剛右大變な奴と云つて誰を見つけたのだ甲州彼奴を、ソラ、彼奴なんです剛右彼奴ちや分らん、慌てずに落ち着いて云ひなさい甲州敵を見つけたんだ敵を、ソラ、岩屋を潰しに來やがつた旅侍なんで剛右岩屋など、大きな聲を出さんちやないといふに甲州だつてお前、黒法師岳で山賊を稼いで居た頃剛右叱ッ……困つた奴だな、子分の敵を見つけたといふのだらう甲州さうなんで剛右分つた、剛右衛門は外聞を憚つてソコ、小間物屋を立ち出で剛右其

侍は何處に居るのだ 甲州「此方に居るんで、大急ぎで来てお呉んなさい」先に立つて安倍川堤へ出て参り、其處か此處かと探しなが何處にも侍らしいものは居りません 剛右「何處に居る 甲州」先刻此處を通つてたんで 剛右「通つて居たのちや間には合はない、コン度見付けたら後を尾けて、何處に居るか突き止めるんだ せ 甲州「へい、併し惜しいなア、儘かに此堤を通つてやがつたんだがなア……」 甲州は如何にも残念さうに四邊を見廻はして居りました 甲州「頭、ウンニヤ旦那、親方、親分、剛右「何だ 甲州」居る 剛右「何が居るんだ 甲州」か、か、敵が 剛右「何處に居る 甲州」ソラ、ソコの川の中見ねえ 剛右「川の中を見ろだ、川の中には水がある、此邊は安倍川でも大分上手の方だから、足を洗ひに下りる人間も居ないぢやないか 甲州「分らねえな、ソレソコの川の中に居るぢやねえか 剛右「彼れは乞食だよ、侍ぢやない 甲州」ソ、ソノ乞食のやうな風躰をして居るんで 剛右「フーム、侍

が乞食の風躰をして居るぢや、彼の乞食のやうな男が岩屋の乾分らを殺しやがつたんだな 甲州「さうなんで、頭、剛右「何だ 甲州」俺にも一ト太刀斬らせてお呉んなせいで、俺の首へ鐵輪を篋めやがつた奴なんだ、返報をしねえぢや腹の虫が納まらねえ」云ふ間も剛右衛門は沈と乞食躰の男を瞬叩もせず見つめて居ります 其乞食の色の白さと云ひ、目鼻立ちの整つた顔と云ひ、顔ひ付きたたいほどの美男子でございます、 剛右衛門「熟々見て心の中で 剛右「はてさて世にも稀な美男である、何れは由緒ある侍であらうがソレが其侍が乞食の風躰をして居るからには敵討の武士かソレとも外に何か仔細があるか……」と云つて子分らの敵であれば討たすには濟まされまい……」 沈と考えながら見て居ります 山賊の主魁でも改心するとエライことになるものでございます 甲州は気が気でございませぬ 甲州「頭、ウンニヤ親分、何を愚圖愚圖してゐるんで、女なら惚れるツてこともあるが男ぢやねえ

か、敵ですせ、お前さんのためにや大勢の子分の敵だ、俺のた
 めにや兄弟分の敵なんだ、スバリと殺つつけて呉んねえ、よう
 親方 剛右「まあ考えさせて呉れ 甲州「考えるも考えねえもあるも
 ちやねえ、廻り合ふたが百年目だ、殺つ了つてお呉んなせえと
 いふに、さては頭、怖氣でも出たんですかい 剛右「怖氣は出ねえ
 が…… 甲州「ちや俺が殺つ付けら、頭に頼んでたんちや間拍子に
 や合はねえ、頭、俺が不意討にやッ付けやすせ、好うがすな、
 お前さへ後方に付いて居てお呉んなせえ、殺られさうだつたら
 助太刀をしてお呉んなさいよ 剛右「諾々、お前「ト太刀でも斬つ
 て見ろ 甲州「トコロがお前、彼奴は狐か天狗か何方かを使ふんで
 エイツとやらかすと、鐵の輪がスポツと首へ倅まらふつて奴だ
 剛右「まあ一つお前斬つて見ろ、子分の奴へ功德にもならうとい
 ふものだ 甲州「好うがす、俺も男だ、人間の五六人は山の中で殺
 したことのあゝ兄さんだ、親方の腰の物を一本貸してお呉んな

さい 剛右「さア」小刀を一本抜いて渡す 甲州「頭は腕が利くだけ刀
 だつて重い奴を挿してゐるなア、コレがお前さんが小刀で、太刀
 と来たなら何貫目あるか知れねえだらうな 剛右「文句を云はないで
 斬つて見ろ 甲州「叶はねえと思つたら頭を呼ぶから頼みますせ、
 直き来てお呉んなせえ 剛右「好いとも 甲州「ちやコレから兄弟分の
 敵討ちだ、甲州は腕を巻繰つてジリ〜と忍び寄る、ソレども
 知らず川の途中で餘念もなく衣物を洗つてゐるのは乞食姿の佐々
 百合之助「美政でございます、根が女だけに洗濯などは功者なも
 のである、石の上に乗つてジャブ〜と流水で小袖を洗つて居
 る、其後方からジリ〜と忍び寄つた山賊の甲州、一刀を抜い
 て背後に隠し、喧嘩犬が毛色の美しい豹を狙ふやうな格恰でビ
 ク〜しなから忍び寄つて、抜刀を上げ段に構えるや否や 甲州「兄
 弟分の敵、此畜生」サツと斬り付けた太刀風に、百合之助は脊
 中から眞二ツにされたかと思ひの外、甲州の方が水の中へ眞倒

様に投げ付けられ、アブ、アブ、と水を飲みながら甲州頭、
 た、たすけて呉れい……」何さま流れが急だから溜りません、
 「た……たすけて」といふ間にドン、下流へ押し流されて
 三度目に「頭ア……」と呼んだ頃にはモ一五六町も下流の方で
 浮いたり沈んだりして居る、コ一なつては剛右衛門も百合之助
 に向つて行かすには居れません剛右「コ一お待ち、日外は黒法師岳
 で子分の奴らが御厄介になりやした、お蔭で百人近え子分が殺
 されてお前さんの方ちやお手柄だつたが此方ちやア大した手
 がひだ、俺は剛右衛門といふ劣な奴郎だが子分の爲めにや親分
 と云はれる因縁があるんで、敵呼ばりもおこがましいが、コ
 レも義理だ敵手になつてお呉んなさい」云はれて百合之助は濡
 手を拭き百合「すりや其方が岩屋の頭領、山賊の張本と云やるか
 剛右「お察し通り山賊の張本人、討たれるものなら討つてお了ひ
 なさつた方が世の中の爲めがせうよ、討つも討たれるも銘々

の腕次第、其代り俺ばかり刃物を持たうとは云はねえ、見受け
 るどころ無腰らしいから此通り刀は捨てやすせ、腰の一刀を抜
 いて川中へ投げ捨て、剛右「素手と素手の腕比べ、敵手になつて貰
 ひませう百合「さて、山賊にも似合はぬ見上げた心がけ、根
 からの山賊でもなさうな、敵手にして恥かしからぬ者ぢや、
 討つも討たれるも武士の習ひ、いざ参れ」百合之助が身構える
 と剛右衛門も身構え、互に最初は組み打ちをいたして居りまし
 たが、力では逆も剛右衛門に叶はぬと思つたものか、百合之助
 は奥の手を出してバツと消えた剛右「さては隠形を心得居るな、
 諾しッ」コレまたバツと消えて了つた、コ一なるど薩張ワケが
 分りませぬ、何處に何をして居るのか皆目講演者の方でも見當
 が付き兼ねます、と何處に何をして居るのか皆目講演者の方でも見當
 と申しましたも前申上げた通り相當の棲居になつて居ります、穴
 其棲穴で留守居をして居るのが不彦六郎重治である彦六「佐々

氏は大層遅い、何時もコンなに遅くなるワケはないのだが、若
かすると途中で……」虫が知らせるといふものか彦六郎心配で
溜らない彦六一つ川まで行つて見やうかな」立ち上つて穴を出
たのが彼れ是れ日没時の六ツ半頃、コレも乞食のやうな風体を
いたして居る、まだ十七八の今ならば中學生といふ年頃でござ
います、途中でも歩るくより走る方が楽である、山を後方に安
倍川へ行つて見ると何處にも百合之助の姿が見えませんが、ま
か百合之助クーンと呼び立てるワケにも行かない彦六はてな、
此處に洗ひ半しの衣物が置いてある、コレは儲かに佐々氏の物
である、コレを此處へ置いて妻の見えんといふ法はない、コレ
は必だ何かの變事が出来たに相違ない、一番探し出すとせう
ソレより堤へ上つて眼を八方に配り、耳を敬て、四邊を見廻す
と講演者などの眼には見えませんが、川原の砂地の上で二人の
る、ドンな物が見えるかといふと廣い川原の砂地の上で二人の

勇士が大童になつて戦つて居ります、一方から劍の雨を降らす
と一方から炎の氣を吐き、一方から鐵の網を巻き付けると一方
の勇士は猛火で焼き切る、火と金、鐵と炎の戦である彦六やア
戦つてる、彼の藝當は佐々氏でなうては出来ぬ秘術ぢや、一方
氏はらしい、彼の藝當は佐々氏でなうては出来ぬ秘術ぢや、一方
は誰であらう、好く見ると見知らぬ男である彦六さては彼奴め
火遁の術を心得居るな、佐々氏は金遁の名人、火と金では金が
負ける、佐々氏の旗色が好くない筈ぢや、よし、身共が一番
助太刀と出かけやう」いふかと思ふとヒラリと身を躍らせ、川
原の方へ飛鳥と飛んで行つたがコレまたバツと姿が消えて、在
所が皆見えませんが三人の眼には判然と見えて居る、百合之
助も剛右衛門もモい汗ビツシヨリと掻いて顔が火のやうに赤く
なり、呼吸は荒く、全身は綿のやうに疲れて、兩人ともヘトヘ
トになつて居ります、百合之助はソレでも負けては居ません、

エイツ、と右手で空を切ると四邊が一面に劍の山、尖つた氷柱を植えたやうに鋭い刃の鉾が轟々と天を向いて立つて居ると、ソレが八方から剛右衛門へ飛んで行く、剛右衛門は何を小癪と九字を切ると、猛火が炎々と燃え上つて刃の鉾を焼き鈍らせ、舌のやうな眞紅の炎でペロリと百合之助を舐めにかゝる、百合之助はモ一根も力も盡きたと見えてエイツ、と叫ぶ聲さへ威勢がありません、若し一度でも炎の舌が軀に障つたら百合之助の命はないことになる、命に別條があつてはと思ふから高さ一丈もあらうといふ大鐵板を高塚のやうに張り、其手前で吻と息を吐く、間もあらせす鐵板は眞赤く焼けて紅蓮の炎が上から下からも百合之助を舐めやうとする、百合之助はいよ／＼防ぎの道がございませぬ、百合焼かば焼け、殺さば殺せ」と覺悟を決めて眼兩を堅く閉ぢて居る、時しもあれ一天俄に掻き曇り、車軸のやうな雨が一時にドツと降り出したから溜りませぬ、流

石の紅蓮も忽ち雨に消されて眞紅に焼けた鐵板が元の如く黒く冷たく相成る、百合や、ッ……」驚いて眼を開けると不破彦六郎がスツラと立つて居る、百合「オー、不破氏、彦六、御心配あるな、佐々氏、百合、好くこそお助け、彦六「お互さま、ちや」ヒラリと鐵板の上に飛び上り、外を見ると高橋剛右衛門、不思議さうな顔で彦六郎を見上げて居る、彦六「驚くな瓢六玉、吾こそ佐々百合之助が義弟、不破の彦六郎重治なるわ、思ひ知れ、エイツ」一聲勇ましく叫ぶと四邊一面の大海となり、山のやうな怒濤が剛右衛門の頭の上から唯一ト呑みと冠さつて来る、剛右衛門もさるものなり、剛右「小敏しや小童、道照が手並、見よや」とばかり、エイツ、ヤッ……」白煙濺々と立ち昇つて剛右衛門の全身を包むよと見る間に虚空高く昇つて濤を眼下に見下し、上から大小の火の玉を雨霰と降り出した彦六「猪古才なり、エイツ」地から幾万筋の水柱が立つて降り来る火の玉を難なく消し止め、反對に氷の礫

を上下左右から一同に投げつけた、コレには剛右衛門も叶はぬ
 と見えて、火矢に乗つて真倒様に地上へ落ち込んで来るを得た
 りと百合之助が飛びかゝつて、千本の鎧を一齊に突き立てる、
 剛右「呀ッ……」聲と同時に姿が現はれて剛右衛門は川原の砂地
 へ両手を支いて居ります、續いて百合之助彦六郎も姿を現はし
 左右から組まんとするを先づくと支えて剛右「恐れ入つたるお
 手並、逆も吾儕の及ぶ處でござらぬ、いざお討ち取りを」首を
 突き出して觀念の眼を閉ぢる、コゝになると真劍勝負でも武士道
 といふものがあるから無茶は出来ません彦六「諾、首にしてやる」
 彦六「何と云はれる百合討ち取るには實にも惜しい武士でござる」
 剛右「衛門に向つて百合山賊の巨魁とは云へ天晴のお手並、心底
 よりの山賊ではござるまい、お身許をお明し下さるまいか剛右
 何事かと思へば意外のお詞、お耳に入れるほどの者ではござら

ぬ、いざお討ち取り下さる百合いや、お手の内と云ひ見上
 げた御心底、斯くいふ吾儕は世を忍ぶ浪人なれど、何れは相應
 の働きたしたたい所存、四人の同士が結社を結び居ります、御
 迷惑だになくば同士へも推挙いたしたいと存する、お身許お明
 し下さる剛右「何、各々方は四人の御同士と……百合風雲急なる
 今の時節、手並を見せるは好個の時世でござる、剛右拙者と今
 に前非を悔ひ、何れにか仕官の所存で當地まで参つた者、すり
 や身許をお聞き下さるか百合「是非に承りたい、斯くいふ拙者は
 越中富山の出生、佐々百合之助美政と申し、斯くくの者でござ
 る、また此仁は不破彦六郎重治殿、斯くくの御出生でござ
 る」と逐一二人の身許を明したので、剛右衛門も嬉し涙に暮れ
 剛右「有難きお詞、さらばお聞き下され」とこれより身の上を物
 語つて四人の同士に加はり、いよ／＼五通五勇士が打ち揃ふて
 驚天動地の働きをいたさうといふお咄

エ、前席に引き續きお機嫌を伺ふ、高橋剛右衛門道照は京都東山の出世でございませぬ、これは剛右衛門が百合之助に物語つた身許を其ま、講演者が代つて申し上げるのでございませぬから其お意でお聞き取りを願ひます、京都の東山に稚兒ヶ池といふのがある、京都のお方は御案内でもございませうが、随分深い池と見えまして漫々と湛えた水の色は深緑と申しませうか、紺碧色と申しませうか、兎も角凄じいほど深さうな色を帯びて居ります、周囲は樹木が森々と生ひ繁り、晝でも此邊にあまり氣持の好い處ではございませぬ、此池を稚兒ヶ池と申します、ついでには色々因縁故事來歴があるやうにございませぬが、演者の調べましたる處では泉涌寺の稚兒に慈恵といふ美少年があつた、

第二席

普通申すやうな月並の美少年と違つてソレこそ懸値のない正味の美少年でございませぬ、此美少年に懸想して居る女が京に何人あつたか知れませぬが誰一人思ひを遂げたものがない、何と云つても一方はお寺の稚兒でございませぬから當節の美少年のやうなワケには参りませぬ、當節でございませぬと女の方から惚れるのを待ち兼ねて猫が魚へ手を出すより女と見たら直ぐさまチヨツカイを出します、なか／＼女の方から惚れて来るのを待つて居るやうな氣の長い美少年はまづないと云つても然るべしである、ソレも無理はございませぬ、お寺の名は忘れましたが某る山寺の和尚さんが祇園新地へ浮かれ込んで酔つた揚句小櫻といふ洋食を十二皿平らげ、グデン／＼に酔つ拂つた揚句小櫻といふ娼妓に抱かれて寝たさうで、其時の小櫻といふ娼妓の感想が俗歌となつて流行いたして居ります、何ういふ歌かと申しますると、坊主抱いて寝りや可愛てならぬ、何處がお聲やら頭やら、

……和尚さんがコノ調子でやるから當世では小僧や稚兒も決して負は取りません、けれど今から千年ばかりも昔に相成ると佛門に入つた人の品行は誠に嚴重であつたものなさうで、女郎買ひどころではございませぬ女と口も利かなかつたものでございませぬ、ソコで此慈恵といふ美少年に思ひを寄せたものは何十ダースとあつても手を握つたり接吻したりしたものは唯の一人も無い、唯心で思ふて心で惚れる、偶々參詣の途中行きちがふことでもあると此處を詮度と秋波を使ひ、篋眼みと間違へられる位ぬが關の山でございませぬ、とところが唯一人、矢文日文で慈恵に思ひの丈けを申述べ非常な美人があつた、年はまだ十五か六、何時も立派な服装を付けて泉涌寺へ參詣に參り、佛前に禮拜して物も云はずスーツと歸つて行くのでございませぬがコレが不思議と日の暮に決つて居る、ゴーンと夕暮の鐘が鳴るとお伴も連れず一人でスーツと來て、お禮をしてスーツと往つて了ふ

何處の娘さんとも何といふ女であるとも知つたものは一人もございませぬが慈恵の手許には思ひの丈けを述べた艶文が山のやうに溜つてゐる、昨日も今日もお目にかゝれなかつた、せめて私が參詣する時だけは本堂か庫裡の入口か乃至お庭にでも出て居て欲しい、といふやうな文句の書いた手紙もある、コレにも何處の何といふ名は書いてございませぬ、唯御存じよりしてある、最初は慈恵も相手にせず貰ふ端から文は焼いて了ひ、一心不乱に教義を守つて居りましたが餘り度重なるのでツイ逢ひたいやうな心となり、或日のことと晩の鐘の鳴るを合圖に、お寺の門の外に立つて居ると本堂の方からお禮を澄して來た例のお美人の物も云はずにスーツと慈恵の前を通つて行き過ぎますから慈恵は鳥渡拍子振りがして了つた慈恵おかしな女もあるものだ、聲一つ掛けん位ならアレほど五月蠅く艶文を寄越さんが可い、大阪辨で云へば「しよもない」といふところであ

る、コーなるとコン度は慈惠の方から詞の一つ位あかけて見た
いやうな心になる、コレが人情でございませぬ、慈惠「モシ、
シ、」呼んで見るが返事もいたしません、大きな聲を出す
お寺へ聞えるからブラ、と散歩でもするやうな体裁で後を尾
け、
「モシ、」と呼んで見るが振り向いても呉
れない慈惠容色は好いが金聲かも知れん」と思つて、二三町も
歩いた處で呼びかけて見ると其女は四邊に目を配りながら側へ
走り戻つて、突如慈惠に取り籠つてヒイと泣き出した、何が
悲しいかと聞くと嬉しいから泣くといふ、これが二人の中の戀
の糸口となつて慈惠は悪い、と思ひながら其女と構曳をいたし
て居りました、日が暮れるとお寺の門から出て其女と構曳をいたし
じて青瓣のやうに相成り、讀經の聲も精魂の盡きた死病の人
のやうな聲に變つて全く以前の面影はございませぬ、住職も變

に思ひ番僧も首を捻つて居ります、ところが或日のこと、番僧
が例によつて鐘樓へ上り、ゴーン、ゴーンと晩の鐘を撞いて下
へ下りかけると、門を忍び出る慈惠の姿がチラと目に付いたの
で番僧「コリやおかしい、一つ何處へ行くか見てやらう」と忍び
がくれに尾けて行く、山の中の古池の側で立ち止り、何やら一
人でベチャクチャ云つて居ります番僧「オヤ變だせ、コノ夜中に
コンな古池の側まで來るのみか一人でベチャクチャ云つて居る
ところが、狂に狂人沙汰だ、あの美少年が青瓢箪になつたのも
氣が狂つた所爲だらう、黙つては居れん早速和尚さんへ此事を
傳へやう」と急いで寺へ戻つて住職に其事を話す、住職もソレ
は捨て置けんといふので翌日から慈惠をひと間へ閉ぢ込めて一
ト歩も寺から外へ出さんやうにした、すると恰とソレから七日
目に慈惠の姿が見えなくなつたので寺では大騒ぎとなり方々手
を分けて探したが皆目行き方が知れませぬ、二三日経つてから

番僧が若しやと思つて古池へ行つて見ると慈惠の屍骸が浮いて居たので番僧は腰の要を脱して了ひ、膝行るやうにして寺へ知らせに戻つたのでお寺では早速死骸を引き揚げて怒ろに葬ひをした、ソレから此池を稚兒ヶ池と呼ぶやうになつたといふことが書いてございませぬ、其相手の女が何であるかを調べて見ました、コレは何とも書いてございませぬ、けれど一つ不思議は其池の一町ばかり下手に一軒の樵夫の家がある、此樵夫の家に慈惠が入水してから一年目に一人の女の子が生れて、目もあり鼻もあつて別に變つた人間ではございませぬが、此女の子が慈惠髣髴で十六七になつた頃は脊丈けから聲まで其ま、だといふ評判、コレは十九で死にましたが後から生れた子は親の樵夫に髪髣髴である、其次の代にも慈惠に瓜二つの男の子が生れ、其次には女が生れた、コレいふ風で代々一人づゝ慈惠に似た子が出る、無論容色が好いから男なら美男、女なら素的な美人でございませぬ、そして代々樵夫を渡世といひ、榮えもせず枯れもせず幾代か續いて、織田信長が京へ上つた頃にはお炎といふ娘が出來て居つた、これが慈惠に髪髣髴の女でございませぬ、無論美人である、恰とお炎が十七の春、山から杜鵑花や櫻の花を折つて京の町へ賣りに行き、日が西へ落ちかけた頃五條の橋を東山へ渡りかけると向ふから來かけたのが織田家の武士である、花見戻りとお炎は五六人とも花の枝を擔いで微酔機嫌の千鳥足である、お炎は小さくなつて欄杆に加附くやうにして通り過ぎやうとする、千鳥足が早くも目を付け、△「イヨ、コレは近頃素的な美人、何處から何處へ參る」お炎はハツと思つて顔上げて居る、△「ホ、これは今小町でござるな、コレ、其方の名は何といふ名を申せ、○成るほど是れは堀出しでござるな、年は幾才ぢや、亭主はあるか」お炎を取り巻いて容易に通しません、ソレばかり一杯機嫌で手を取る、抱き付く、甚だしい

二二

奴は口を吸はふとしてゐる。X「チョッ、チョットで好い、口を口をお炎あれー。O「コレさ左様に聲を立てるものではない、コレも其方が容色好う生れたからちや男殺しめ」キユーツと後方から抱き締めるお炎あれー、あれー」お炎は怖さに悲鳴を立てる、ソレでもなか／＼止めさうにいたしません、すると中に一人の若侍が居た、同じ連ではあるが此武士だけは手も口も出さず、真剣にお炎に惚れて居たのである、此時連の武士を押し止め若侍各々方、ソレは無法と申すものぢや、御覽なされ泣いて居りまするぞ。△「イヨ、これは、高橋氏には娘に恩を賣つて蔭から密と手に入れやうといふ寸法でござるな高橋左様ではござらぬ、唯可愛さうに存するからちやX「その可愛さうなが曲事でござるて。O「さやう、高橋氏はお腕前も儲かな代りに、此方のお腕前も儲かてござるぞ高橋さあ何でも好うござる、お止めなされ、許しておやりなされ」ソレで何うやら圍み

を解いて連中は橋を渡る其際にお炎は虎口を脱れて橋を渡り、無事に我が家へ戻ることが出来たが偕て其翌日である、山へ花を折りに行つて戻つて来ると一人の武士と父親が椽側で何事か談判最中、お炎は胸をヒヤツとさせて好く見ると其武士は高橋といふ武士である、お炎さては私を助けてやつたから、酒でも出せと云つて来たのではあるまいか」と物蔭で聞いて居ると高橋拙者は高橋虎松といふ織田家抱えの武士である、昨日五條橋に於て其方の娘をお炎を見初めた、家内に呉れまいか父親御覽の通り私には樵夫、樵夫の娘がお武家さまの奥方に、へ、へ、御冗談を被仰いますな高橋あいや冗談ではない、真剣ぢや、是非に所望である父親では真剣ぢやと仰せで高橋無論のことぢや父親でございますか、とところが旦那様、彼れは私の爲めには獨娘でございまして、實は養子を娶ひたいと存じて居りますので高橋養子と云やるか、では拙者を養子に貰ひ呉れぬか父親貴方さまを

ア一養子に、へ、へ、へ、冗談ばかり仰つしやいます 高橋「冗談では
ない、真剣ぢや 父親何でも真剣でございませぬ 高橋「高橋虎松は
生れてまだ冗談を申したことがない、駄口一ツ叩かぬ男ぢや、
口から出た詞は腹のドン底ぢやと思ひ呉れ 父親さう仰つしやれ
ば爾らしい武骨なお方さまらしうございませぬが、では一應娘の
心も聞いて見ませう、幸ひ唯今山から戻つて参りましたで」父
親は娘に向ひ 父親「オ一其處に居つたか、ドーぢや彼のお武家を
養子に貰ふか お炎「彼のお武家は父さん、昨日五條橋で」と昨日
のこゝを物語り お炎「樵夫の娘にお武家さまが養子……ソレは乾
度「彌られるのでござんす 父親「私もソ一は思ふがな、見たところ
正直さうなお方ぢや、ま私に任して置け」コ一いふ調子で父子
抱えられ、唯寝泊りだけをお炎の家でするといふことに一決し
て 其夜の間に お炎は高橋虎松と契を交すことになつた、此高橋

虎松はドーいふ人物かと申しますと身分は大して好いといふワ
けではございませぬが持つて生れた力量は大したもので、十二
才の時に見せた、長ずるにつれて腕力が増して行き、此頃では優
がして見せた、長ずるにつれて腕力が増して行き、此頃では優
に四五人力はあつたのでございませぬ、天正十年六月二日、惟
任日向守智明光秀が反逆して不意に本能寺を圍み、織田信長公
を弑しまゐらせんと関を作つて押し寄せた、虎松は恰ごお炎の
家で懐妊の祝ひをいたして居りましたが、本能寺の變を聞いて
取るものも取り敢えず本能寺へ駆け付け、三尺九寸の大太刀を
振つて寄手を五段三段に切り開き、明智の勇士安田作兵衛と渡
り合つて二太刀斬り付けたが作兵衛の運が強かつたと見えて
鏡の草摺を切られて左手に微り傷を負ふたばかりである、けれ
ど其手並には逆も叶はぬと思つたか旬々の体で奥殿へ北げて行
くを遣らじと後を追ふ處へ、横合から現はれたのが山本三右衛

門の手の者三四十人、虎松心得て五人を斬り九人を倒し、七人を蹴飛ばして三人の首を引ッこ抜き、散々に追ひ拂つて安田作兵衛の後を追ふ其背後から物をも云はず斬り付けたのが山本三右衛門である、虎松が斬られて呀ッ倒れる處を得たりと三右衛門が乗りかゝり、太刀を真向に振り騷したところを虎松下から右足を揚げて思ひ切翠丸を蹴飛ばしたから溜りません、ウーンと反りかへるを隙さす起直らうとしたが悲しいかな手負の身である、軀の自由を失つて悶えつゝ起きんとするを三右衛門の手の者が飛びかゝつて虎松の首を刎ねた、コいふ力量の豊な虎松をお炎は聲とも付かず亭主ども付かぬ妙な關係で一年ばかり契を交はす間に腹には子が宿つて居りました、其處へ虎松が討死し、續いて父親が病死をいたし、残つたのは腹ボテのお炎一人である、七月八月までは女ながらも樵夫を渡世として居たが臨月になつてからは京へ商ひにも出られず、山から伐つて

来た薪や粗朶を家の周囲へ山の如く積んで置き、身二つになつて京へ賣りに出ると或晩の真夜中である、圍爐裡の火の始末が悪かつた見えとお炎がグツスリ寝込んで居る間に火が山と積んだ粗朶や薪に燃え移つて全家が火に包まれて了つた、お炎は生きながら蒸し焼にされる勘定でございませ、ところがお炎は一向焼けない、圍周を焔で包まれないが蒲團の上にはお炎は一向焼けない、欠伸をして延びをしで、ポリと手足を掻いてソレから立ち上つて火の中を平気で外へ出るのに指一本火傷をしません、不二身は斬られても傷くないと申しますがお炎はドいふものか火を些しも熱いと思はない、コレは唯お炎ばかりでは無いので、代ふ生れる慈恵似の子供は男女に拘らず火は少しも怖れませぬ、コンナ譯でお炎は大事は脱れたが其日から着のみ着のままで何うすることも出ない、仕方がないので京へ乞食に出ました、臨月腹を抱えた

乞食といふので貰ひはナカク、澤山ある、ソコで一日京へ出ては二日位ゐる食ふだけの物を貰つて来て稚兒ヶ池の縁の木立の中

のがお炎である お炎好うこそ拾つてやつて下さいました、此子の父は高橋虎松といふコレコレいふ武士でございませぬ、決して氏素性の知れぬ者ではございませぬから何うぞ育て、やつて下さいませ、これが一生のお願ひでございませぬといふかと

供心にも火遁の術を悟り、ソレより又九郎を養父の敵として附
け狙ふ内に、又九郎は山科を逐電して伊吹山へ上つて又九郎を一刀の下
つてゐると聞き、十五才の夏伊吹山へ上つて又九郎を一刀の下
に斬り捨て、剛右ソレより黒法師岳に山寨を構え、道ならぬ渡世
をいたしてござつた、貴殿が岩屋へお越しの砌は拙者は既に改
心して何れかへ仕官せんと、山寨を見捨て、遠州濱松へ志ざす
途中でござつた、それから斯く、期やうの次第で當地へ参
り、貴殿に手向ひ仕つたやうな始末でござる」と逐一を物語つ
たので百合之助も彦六郎も顔見合せ「兩人さて」と好く似た身の
上でござる、何は兎にあれ吾儕が棲家へお越し下され、いざ、
御同道申さう」と二人に左右から促されて高橋剛右衛門道照も
剛右ソレでは御厚意に狎え御伴仕らう」と三人手を携えて賤機
山の隠穴に戻り、爰に五通五勇士が改めて兄弟の義を結び、い
よく大阪へ入城の一役。

第三席

安倍川の川原に於て端なくも百合之助の眼に留つた高橋剛右衛
門道照、さらばと云ふので不破彦六郎重治の三人打ちつれ賤機
山の隠穴へ参り、先づ此方へと正座に通して同士の金剛坊源三
郎の兩人を待つて居りますと、やがて戻つて来たのが兩人であ
る金剛百合之助殿源三彦六郎殿百合オ一これは御兩所、好いと
ころへ戻られた、實はコレ、斯やうの次第で此仁に廻り合ふ
てござる、此仁はかく、斯やうの人物で斯やうの腕前、同士
の一人に加えられたい彦六拙者から頼み入るでござる」と兩
人が口を揃えて申込んだ、源三郎も金剛坊も少しも異存はござ
いませぬ金剛それで恰ご五人揃ふた源三五通の名人が揃ふ上は
天下無敵でござる、改めて同士の酒杯を挙げ兼ねて此棲穴と袂

別の宴を開かう」と包を解くと中から酒樽が出る、金剛坊は竹の皮を出して下物と牡丹餅を出し金剛拙者はコレちや」牡丹餅をバクリくとバク付き出す百合何、此棲穴と袂別と仰せは、源三佐々氏、不破氏、高橋氏、お悦びなされ吾儕の時節到来いたした彦六何、時節到来とは源三いよ、戦争に相成つた百合何と仰せ、戦争に成つたとは關東と大阪とでござるか源三いかにも、各々方お聞きなされ斯やうちや」三人は膝を前める、源三郎と金剛坊は一座を見廻して交る、語り出す源三大阪の秀頼公が京都大佛の鐘を鑄らせられたは御存じであらう、其鐘に銘がござる、普通天下の泰平を祈るの文句でござる、それを此駿府に住む大御所の狸爺め、四の五のと文句を付けて家康を呪ひ殺すのちやと申し出した金剛佐々氏、豫てお聞きに入れた國家安康の文字でござるよ百合成るほど源三ソコで大阪から片桐殿が其文句の申開きに參られたが、狸め、三つの難題を云ひか

け、ソレに應ずるなら許して遣はさう、應せぬに於ては所存があるど威したでござる、どころが、片桐殿大阪へ立ち戻られた限り更に音沙汰ござらぬ、淀殿を妾にも送り來さず、大阪城も立ち退かず、江戸へも参勤せぬは必定向敵の所存である、皆戰の準備いたせ、と狸殿から布令が下り、江戸からは二代將軍、駿府の狸殿も早や出馬と相定まり、軍兵が犇々と集まつてござる百合何、將軍も大御所も出馬と……彦六大阪へ討手の爲めでござるか源三いかに左様ちや、ソレがため大阪城に於てもお手振りはござらぬ、コレまた太閤恩顧の士へ、夫々布令を出されてござる剛右何、大阪に於ても布令が出たと仰せか金剛いかにも、そのみならず大阪方では、廣く天下の浪人を集め居られるちや剛右何、大阪方では浪人を召し抱えと……源三各々、時節到来とは此事でござる、いよ、花を咲かす時が參つた、剛右フーム、すりやいよ、親の名を揚げ彦六功名手柄をする

時節でござるの源三狸退治の季節でござるわ金剛面白う相成つ
たではないか百合まことに喃五人が五人とも腕を擦つて悦ん
で居ります源三各々方此上は一刻も早く大阪へ参るが得策
今宵にも出立いたさう金剛其事々々いざ各々住み馴れた住
み家と永の別れでござる過ごされいコレより五人が互に酒
を酌み交はし、いよ大阪へ向け出立といふ處へ、何處から
ともなく人馬の音が聞えて誰やら穴の入口を覗くものがある、
彦六郎早くも見て彦六各々御油断召さるな何者か穴の入口
を伺ふたでござるぞ剛右拙者が見て参るでござる高橋剛右衛
門バツと姿を隠して穴外へ出て見ると穴の外は云ふまでもな
く、賤機山の木立々々麓の淺間神社から安倍川堤城下から
街道へかけて數万の兵馬が隙もなく集まり、而も甲冑で身を固
めた二三千の精兵が手に手に弓鐵砲を携え、穴を目がけて今に
も發砲せんといたして居るから剛右衛門も驚いて了つた剛右各

々方、一大事でござる」と穴の中へ報告に戻る、四人の同士も
大に驚き金剛早や雲霞と押し寄せてござるか、それでは各々、
東海道筋を大阪までは却々のこととござるぞ百合いかに喃、
道々、國々を早や堅めてござらう彦六郎進み出で彦六あいや
その御心配無用でござる、豫てかやうなこともならんかと存じ
不破丸を準備いたし居ります、海路にて大阪へ入らば、人なき
處を行くも同然でござる金剛出かされた不破氏百合流石は不破
殿でござる源三此上は銘々に十八番の手並を見せつ、船へ乗り
込むことにいたさう彦六ではコ一いたしては何うでござる、拙
者先づ濱邊へ参り、傳馬の準備をして各々方を待ち受け居りま
す間、巡に後からお越し下され、集合の場處として印をいたし
て置きます百合何と印をいたされる彦六五人の五の字に因んで
霧中へ五の字を描き置きます剛右空中へ五の字を彦六いかにも
霧にて五の字の現はれた處を目印にお越し下さらば拙者傳馬

船を差向け申すちや源三「好いお考えちや、それでは一人々々出るといいたし、先づ不破氏から彦六「然らばお待ち申す、御免」穴を出て見ると成るほど数千の軍兵が穴の前に立ち塞がつて今にも鐵砲を放さうといたして居ります彦六「猪古才な虫けらめ、同じ士を鐵砲で打ち殺さん所存と見えるな、よし」コトして呉れる「エイツ、と氣合をかけて火繩と烟硝へ霧を吹きかけ、手近な白馬を奪ふてヒラリと打ち跨がり彦六「やアやア虫けら、何時まで案山子の真似をいたし居る、射てるものなら射つて見よ」呼ば、る聲に部將「ソレ出た、射つて捨てよ軍兵「心得たり」と千人近い鐵砲組が狙ひを定めて射ち出したが、何の鐵砲も申合せたやうにドンともボンとも云ひません△「こりや不思議ちや、今まで付いて居た火繩の火が消えて居る、コレや大變」と慌て、火打石をカチ／＼云はせるもの、火口へ呼吸を吐きかけるもの、偶々火繩に火の付いてゐるものも、烟硝が濡つてゐるから

彈丸を弾き飛ばす力がない○「何をツ」と引き金を引くとポツと燃えたり、スツと使えない音を立てる部將「者共何を愚圖々々いたし居るのちや、ソレ／＼、曲者が北げ出すわ、早く射たぬか軍兵「心得候」狙ひを付けてカチツと引金を引く、鐵砲が一齊にスツ、スツ………使えないこと夥しい、彦六「郎はカラ／＼と笑ひ、彦六「さまを見ろ、はッは、は、」笑ひながら白馬にト鞭當て雲霞の如く群がつかた數万の兵馬を目がけて、颯と飛び込むと、△「ソレ大浪が寄せて来た」×「洪水ではござらぬか○「いや、大雷雨でござる、何れも雨具の御用意」狼狽して道を押し開く彦六「郎人なき境を行くが如く、白馬を疾風と走らせて海岸さしてハイヨ、ハイヨ、續いて現はれたのが佐々百合之助美政、靈刀を押し戴いて何やら口の中で唱えると刀の柄から二夕筋の針金が一直接線にスーッと海岸まで走り、ソレが左右の兩方に別れて二三寸ほどの長さにブツリ／＼と切れたと思ふと兩側に列

んだ軍兵は馬諸共ガンヂ絡みに括られて手も足も出たものでは
ございませぬ △コレはしたり戸坂氏、貴殿ともあらうものが
拙者を針金縛りになさうとは、何の怨みがあつてござるな
×コレは横杉氏とも覺えぬ口上、貴殿こそ拙者を馬ぐるみ針
金縛りに ○さういふ貴殿も □オヤ貴殿もでござるか、アレ
成る、手が折れる ○首が締つて参つた △拙者として其通り、あ、苦しく相
其前を百合之助は御免とも云はず通り過ぎて濱邊へ平氣で出て
行つて了ふ、次に現はれたのが意地悪の金剛坊、金剛やア寄せた
わ、コノ人数が残らず大阪へ押し寄せるな、やい瓢六玉の
面々、拙僧は金剛童子の御弟子にして金剛坊といふ出家佛門の
乞食坊主ぢや、近々に大阪に於て見参いたすぞ、まづソレまで
には命を暫く預け置く、大切にして病死なぞすまいぞ 部將やア
彼奴こそ駿府城に忍び込み、木像の薬師如來の片割に乗

り移つてお庭から飛び去つた曲者なるぞ、打ち捕つて功名せ
よ軍兵心得たり」數千の軍兵が一時に押しかけ金剛坊を我れこ
そ打ち取らんと、弓矢鐵砲を雨霰と射ちかける、コレには金剛
坊も溜りませぬ 金剛「飛び道具には恐れ入る、今は大事の場合で
ある、ウカとして命を殞しては大變」と例の通力を呼んでバツ
と姿を隠し、一本の樫の棒に變じて空中をキリ、と舞ひ狂ひ
金剛「再會までの紀念として面体に印を付けて置いてやる、遠慮
には及ばんから皆眉間を突き出して置け」云ひつ、樫棒を水車
の如く廻轉させ、當るを幸ひ額を目がけてコツン、ビシヤ
リ、相手が死なんやうに手加減をしなからビュ、ビシヤ
殿つて廻る、其數およそ六百人、何さま人間の姿が見えずに樫
の根棒だけ空をキリ、舞ひするのだから手の付けやうがござ
いませぬ △方々、御用心召され根棒が飛んで参る、ウカと顔
を出すと鼻柱をビシヤリとやられ申す ×いかに顔は出して

此分ならば味方に人数は不用でござる、十人も手の者があらば
百万の大敵も物の数ではござらぬわの源三「いかにも左様、秀頼
公へ忠義の時節到來、さて、愉快でござる、剛右「はい、間も
同士の方々が待ち遠うござらう、ぼつ、参らうではござらぬ
か源三「参りませう」兩人は悠々として恰も其處に人なきが如く
騒ぎ立てる軍勢を尻目に向け、安々と通り抜けて海岸へ出て見
ると既に三人の同士が傳馬に乗つて二人を今かくと待ち受け
て居ります、ソコで五人打ち揃ふて傳馬へ乗り、一町ばかり沖
へ出た頃彦六郎がエイツ、と叫ぶと急流のやうな潮へ乗つて不
破丸がチャーンと傳馬の前で止まつて居る彦六「さア方々、お乗
り下され、手が揃つて居るから造作も何もあつたものではござ
いませせん、四人「さらば乗るといたさう」五人が不破丸に乗り込む
と彦六郎が船長の格となり、帆も張らず、舵も取らず、唯朝の
流れに乗じて沖へくと走り出で、紀州沖から紀淡海峡を過ぎ

て無事泉州堺へ着いたのが其翌日、まるで飛行機よりも早やう
ございます、それより五人が大阪表へ出て豊臣のお抱えになら
うといふお咄、次席でお機嫌を伺ひます。

第四席

泉州堺に於て錨を投じたる不破丸、これより船から陸へ上らん
ど五人の同士が甲板へ出て見ると流石は當時の堺港、大船小船
が幾百艘となく錨を落して帆柱がさながらの林のやうである、
百合「泉州堺とは音には聞いたれど目前に見るは今が初め、さて
ちや、此地の案内は西氏に頼むが好うござる、源三「委細長る」と
源三郎が先に立つて船から下りやうとすると、一艘の傳馬船に
役人らしい者が乗り込んで四挺櫓で漕ぎ付け、役人「コレ、其處

なる船の者「不破彦六郎が應答する彦六何事でございます役人」
何れから参つた彦六紀州沖から参つてござります役人「それでは
米を積んで参つたのであらうの、米は何万石でも買ひ入れる間
安心いたすが好い、唯少々都合の悪いは金子の儀ちや、十五万
石買ひ入れるつもりが二十万に上り金子に不足を生じた、め、
先刻増谷彌十郎殿が大阪城へ取りに参られた、大阪城とて堺か
らは目と鼻の間である、心配はないによつて積んで参つた、け
陸揚をいたすが好からう」問はず語りにも彼も云つて了つた
五人は顔を見合せたが「不破彦六郎彦六心得ました、とこでお
役人さまへお尋ね、米をお買ひ上げには大阪からお役人がお越
しにございますか役人「無論のことちや、お役人もお役人、大野
修理之亮様が御出張相成り居るわ」彦六郎は四人を見かへり、
彦六「大野殿が参り居る、さうにござる源三「大野殿は淀殿のお
氣に入りでござる彦六「ならば、仕官の手引きとも相成らう源三

さればでござるな彦六「拙者少々思ひ寄りがござる間、此儀は拙
者にお任せ下さるまいか源三「何分にお願ひ申す」ソコで彦六郎
は船から上つて大野修理之亮治長に面會し彦六「先刻お役人より
兵糧お買ひ上げの金子御不足の由承つてござる、就いては拙者
弱輩ながら金子少々持ち合せてござる、お役にも立たば仕合せ
に存する治長「何、金子を献納いたしたいと申すか、ソレは近頃
篤志の至りである、關東と戦端を開いた今日、金子は幾何あら
うも足らぬ折柄ちや、悦んで納め遣はすぞよ彦六「お役に立つと
あらば持参いたすでござらう」彦六郎は早速不破丸へ戻つて豫
て用意の金袋を残らず持つて来た彦六「誠に少々ではございます
が、秀頼公のお役に立つとあらばお使ひ下されたい、差し出し
たのを見るとなかく、少くではない、大野治長は驚いて了つた
治長「コレは、夥しい金子ちや、何千両とも數知らぬ、さてさ
て其方は忠義者であるの」悦んでソレを納め治長「して其方は何

處の者ちや彦六天下の浪人にございます 治長何、天下の浪人ち
やと申すか、浪人で斯ほどの大枚な金子を所持する筈がない、
見たところ長者の俸とも見えぬが、其理由を申せ 彦六理由はカ
ク、斯やうの次第と海賊退治の一條を物語り 彦六お役にも
立たんかと残り置いてござります 治長出かした奴ちや、何うち
や、大阪方へ味方する心はないか 彦六お味方せんと態々参つた
ものにございます 治長何も彼も好都合、すりや直ぐにも召し抱
えたい、何、上様へ推舉せよとか、それには及ばぬ、此治長が
請合ひ抱え取らせる、してまた祿高に望みでもあるか 彦六ない
でもございせんが 治長見たところまだ十六七才の少年と見ゆ
る、治長が特別の計らひにより十人扶持で抱え取らせる、破格
であるぞ、何うちや、満足であらう 彦六郎は叩頭もせず立
ち退かうとする 治長あ、コレ、返事もいたさず立ち去るは
何ういふものちや彦六ま、其金子だけお役にお立て下され、

さらば云ひ捨て、見向きもせず行つて了ふ、 治長はケロンと
して居ります、外へ出ると何時の間にか四人の同士が待つて居
る 四人何うでござつた 彦六頭から咄に相成らん 源三郎は治長
の人物を好く知つて居ります 源三野殿では其人を得ませぬ、
士分を見るの明がござらぬ 剛右ま、仕官は急ぐことはござらぬ
要は關東の奴らを片ツ端から殴り倒してやれば虫の納まること
ちや、戦にはまだ日數もござれば、暫く大阪に於て吾々の浪人
振を見せやうではござらぬか 金剛好いところへ氣づかれた、其
事でござる 源三郎も百合之助もソレに同意し 源三聞けば天下
の浪人が雲の如く大阪に集まり、中には町人の分際で衣食に窮
するのあまり、武藝の嗜みあるやうに申し出で召し抱えられん
とする 似非浪人もあるげに承はる、吾儕もソレらの者と同一に
見られては残念でござるにより、仕官はまだ後として暫く大阪
に住居いたさうではござらぬか 彦六さてこそ思ひ止まつてござ

る、大野治長も拙者を町人か何ぞのやうに思ひ過まつたに相違
ござらぬ、西氏の仰せ尤も至極、さらば早速左様のことに決め
るでござらう」コ、に相談が一決して五人は小橋在の農家を借
り受け、時期の来るのを待つことに相成つた、ところが或日の
こと、李桃源の西源三郎行成が玉造を通つて居ると二三十人の
人夫が切と土を運んで居る、何處から持つて来るのかソレが皆
目分りませんが切と土を運んで来る源三コレ、其土は何處
から運んで参るのぢや」人夫共は顔見合せ △ソレを云へる位
ゐならなア ×ソレとも、普通のお手當の三倍は貰はれん
わ源三はて妙なことをいふ」考えながら好く見ると何うやら相
宰山の方らしい源三一つ行つて見やう」田圃傳ひに山の方へ行
つて木蔭に隠れて見てゐると、何處も堀つて居さうには見えな
いがドン、人夫が土を運ぶ源三「ド、可怪い」と思つて側へ
行きかけると見張の武士が武士「コリヤ、其方は何處へ参る

のぢや源三宰相山へ参ります武士罷りならぬ源三参つては悪い
と被仰るので武士無論ぢや源三「ド、いふワケで参つては悪いの
でございます武士理由は申されん、行くことは断じて相成らん」
止められ、ば止められるだけ行つて見たいのが人情でございま
す源三「さやうでございますか、バツ武士「コリヤ、何處へ参つ
た」武士は不思議さうに見廻すが何處にも居りません武士はて
な、今まで此處に居た男が皆目見えなくなつた、まさか狐狸で
もあるまいが不思議なことである」少しも不思議はございませ
ん、源三郎はズン、山の方へ参つて居る、唯武士の目に見え
ないだけのことなんで源三「あすこだ」源三郎は人夫の出で
来る處へ行つて見ると大きな穴がある、モ、二十間ばかり掘つ
て居ると見えて奥の方から人夫がドン、土を運び出して居り
ます、其處へ見廻りに来たのが立派な武士でございます、定紋
が一文銭であるから眞田左衛門尉であることは直ぐに分る源三

真田幸村ぢやな、さては早や紀州の九度山から入城したもので、
しい、それにしても山へ穴を掘つて何うする考へであらう」と
見てゐると、幸村は人夫頭に向いて幸村「ドーぢや、十二三間も
掘れたか人夫はい、今の處で十二間三尺掘れました幸村「二日
十二間三尺か、すると城内へ抜けるまでにはまだ二十日はか、
るの、人夫ソレは充分か、ります幸村「二十日も費えては都合が悪
い、人夫を倍にして夜晝徹して掘つて幾日で抜けるか人夫「ソレ
にいたしまして十日は見えて置かぬと相成りませんか幸村「ソレ
も十日か、困つたことぢやの人夫「まだお急ぎなのでございます
か幸村「予の考えでは五日の間に掘り抜きたいと思ふぢや人夫「五
日の間に……ソレは逆もく、何百人の人夫をお使ひになりま
した處で五日で此抜け穴は掘れませんか幸村「掘れんとは限らぬ、
其方らは土を掘る術を心得居らぬからぢや、術を心得たものが
居ると、五日は愚か一日で掘り抜くわ人夫「重寶なものでござい

ますな、ソレでは其術使ひにお頼になりましては如何で幸村「左
様思ふに依つて城中を隈なく探したが唯一人も參つて居らん
普通有りふれた術使ひは予の家人にも二三人は居るが、土遁の
術は今は日本には傳へたものがある、大山を僅か一ト晩の間に他へ
人が初めた秘術で高さ一里もある、一城一國に此土遁の秘術を心得たもの
移したといふ例もある、一城一國に此土遁の秘術を心得たもの
が是非共一人は居らぬと相成らんものであるが日本六十餘州に
其者を召し抱へたもの唯一人も居ぬ人夫「居らん者のことを
幾許仰つしやつても駄目でございませう幸村「居ぬとは云はぬ、
召し抱へた一城一國の主人が居らぬといふのぢや、昨夜天文に
依つて調べ見たが居ることには儘かに居る、東から西へ飛んだ
とあつたから遠からず大阪へ參るか、ソレとも早や參つて居る
やも知れん、其者さへ參らば直ちに秀頼公へ推舉、禮を厚うし
て重く召し抱へる所存である、其者の參ることの遅速によつて

予の運命も定まり、秀頼公の御武運もトすることが出来るも云へる人夫大したものでございませぬ、いたしますと其者と仰せなさるのには、堀抜井戸屋の本家でございませぬか幸村馬鹿を申せ、土遁の秘術を心得たものは隠形に依つて敵の陣地にも忍べる、戦國には誠に重寶な者であるわ人夫戦國へ忍ぶと仰つしやいます、ソレなら旦那様の御家來にもお居でなさるぢやございませぬか、猿飛様に霧隠様のお二人が幸村才藏に佐助の兩人か、居る、なれどアレは單の忍術使ひぢや、土遁金遁火遁なぞとは少し趣が違ふ、尤も才藏は多少水遁の心得らしいものがあつたものでございませぬ、キントンぢやの人夫、怪体な術もあつたものでございませぬ、此穴が急ぐ、人夫を倍にして十日とは困つた、土遁の名士東より西へ飛んだとある、何とかして招き寄せたいものであるが……待て〜」幸村は天の一

方を眺めて指で何やら繰つて居たが幸村はて不思議、其名士は早や予が側に参り居るとある、フーム、さては隠形に依つて予の傍に潜み居ると見ゆるな、者共役人「ハッ幸村予が参るまで何事か不思議はなかりしか役人左様仰せござりますれば儘かにございました幸村何、あつたと申すか役人一人の怪しき者、此山中へ上らんといたしました故、相成らんと申しましたところハッと烟の如く消えてござります幸村それよ、其者ぢや」横手をポンと打つた時源三郎が姿を現はして兩手を支き源三「恐れ入つたる御眼識、拙者こそ土遁の心得ある者にござります幸村、オ、其方か」幸村は満悦して幸村「待ち兼ねたぞ源三「ハッ、幸村好くこそ参り呉れた、コレにて身の運命も上々吉、内府様の御武運も長久ぢや、まづ〜、まづ其手を」幸村自ら手を揚げさせ幸村「此處は野天、此方へお越しを願ひたい、オ、好くこそ」幸村は手を取らんばかりにして假の營所へ導き入れ幸村「何

小西行長殿の家人にして朝鮮の御仁とや、今は日本……フム、
してお名前が李桃源事西源三郎行成氏と、フム、左様であ
りしか、何、同士の面々がまだ四人、さてこそ東から西へ飛ん
だろな、後刻と云はずコレより直ぐさま、同士の方々を御推舉
申さん、コレ、誰かある大助を呼べ役人心得候」早速使者
を城中へ走らせて真田の一子大助を呼んで来る大助父上、何か
御用にもおはすか幸村、オ、大助か、此御仁は西源三郎行成氏
と申さる、御挨拶を大助ハッ幸村西氏、これは拙者の忝大助
にござる、以後お見知り置きを源三コレはお初にお目にかゝる
拙者は西源三郎行成……大助拙者は幸村が一子大助……互に
挨拶を交すと幸村大助、其方を呼んだは外でもない、此御仁の
同士の方々四名、小橋の農家に在すげちや、秀頼公へ御推舉申
す間御苦勞ながらお迎えに参り呉れ大助ハッ幸村服装を改め、
駕籠の用意、相分つたの大助畏つてござる」大助は急いで服装

を改め、四挺の駕籠を用意して小橋の農家へ行つて見ると金剛
坊と不破彦六郎の兩人が居るばかりで百合之助も高橋剛右衛門
も居りません大助拙者は真田左衛門の一子大助と申すものでご
ざる、唯今西源三郎殿御來宅、父よりもかたの詞によりお
迎えに参つた、いざ、いざ御同道」聞いて金剛坊横手を打ち、
金剛「フム、さては西氏には真田を頼つて参られたな彦六真田殿
とは信州上田の城主なりし……金剛いかにも彦六あの天下の軍
師からお迎えでござるか大助大助お迎えに参つた、曲げてお同
道願はしうござる、ソレ者共、駕籠を持って伴人は一ツ」お伴の
人数が駕籠を二挺持つて来る、其處へまた四挺の空駕籠がホ
ホーと勇ましく駆け付け、武士西氏、高橋氏、金剛氏、不破氏の
御浪宅は此方でござるか、拙者は木村長門守重成の家人、柴山
左近と申すものでござる、佐々百合之助殿御來宅、同士の方々
を御同道いたすやうと主人長門守からかたの詞、何卒御來

駕下されたい、左近御伴仕る、ソレ者共、お駕籠を者共「ハーツ」お伴の人数が四挺の駕籠を列べる、續いてまた駕籠が四挺、ホー、住居は此方でござるか、拙者は織田有樂齋の家來坂部左藤太と申すものでござる、高橋剛右衛門殿と主人有樂齋とは織田信長公よりの御縁續きと相分り、今朝御對面でござる、主人よりも高橋殿よりも御同士の方々をお迎え参れとの御詞、それが爲め態々お迎えに参つた、御同道のほど願ひ存する、ソレ者共、お駕籠を者共「ハーツ」また四挺の駕籠がズラリ列ぶ、前後合せて十二挺の駕籠である、彦六郎と金剛坊は何の駕籠へ乗つて好いか分りませぬ、眞田幸村も頼むに足る軍師であるが木村長門守も聞えた智將である、金剛不破氏、何處へ参つたものであらうか彦六「さればでござる、木村殿も眞田殿も、何れ劣らぬ勇將智將金剛」一度あることは二度あるといふ、コーモ一度に相成るもの

かのう」迎えの方では吾こそ吾こそと争つて居る、柴山左近と坂部左藤太は掴み合ひも初めぬ見脈、左近拙者が先手ちや、左藤拙者が先手ちや、拙者は此處へ来るまでに小橋在をグル、舞ひして参つた、ちやによつて小橋へ来たのは拙者が先手ちやと申すわ、左近申されな、クル、舞ひをいたさうが、ソレは貴殿の勝手といふもの、同士の方々にお目にか、つたは、貴殿よりもズンと先手でござるわ、左藤「エイ、此上は御本人のお心次第ちや、御同士の方々、拙者は織田有樂齋の……左近御同士の方々、拙者は木村長門守の……左藤高橋殿よりの使ひでござる、左近佐々殿の使者でござる、左藤「是非共拙者の駕籠へ左近「是非共拙者の迎えの駕籠へ左藤拙者のお顔を左近「某のお顔を」二人が同一やうなことばかり云つて居ります、流石に大助は一言も口を利きません、黙つて片邊に控えて居る、金剛坊も彦六郎も困り切つて、金剛不破氏、困つたことに相成つ

たの、拙僧は織田有樂齋はあまり好かん、参れば真田殿か木村殿の何れかちや彦六拙者も同様でござる金剛ではコーいたさうか彦六何とでござる金剛貴殿と拙者と二方に分れ、木村殿と真田殿へ別々に参らう彦六貴殿は何れへお越しちや金剛二軒の内なら何方へでも参る彦六拙者も其通り、なれとソレでは織田殿へ相済むまい金剛そこもある、では寧ろ二人とも真田へ参らう彦六ソレでは木村殿織田殿兩家へ……金剛なるほど困つた、不破氏、寧ろそのこと消えてなくならうではござらぬか彦六ソレが好うござらう、では同時に消え申さう、好うござるか金剛宜しうござる」バツバツと二人とも消えて了つた、ソレと見た左近も左藤太もケロリとして居る左近御同士が烟と化つて消えてござるぞ左藤いかにバツと消えてござつた左近貴殿が強情を張らるゝからちや左藤イヤさ貴殿が強情なからでござる左近貴殿が左藤貴殿が二人はまた喧嘩を初めた、大助は一言も云はず

駕籠屋を連れて玉造へ戻りかけると、猫間川の堤で駕籠屋が、俺も變だと思つてたところだ、一体何ういふワケだい △分らねえな」今一挺の駕籠でも同じやうなことを云つてゐる △「旦那様何事ぢや △俄に駕籠が重くなつたので氣味が悪くて溜らねえんですが大助何、俄に駕籠が重くなつたと申すか、一挺か二挺か △二挺なんで」大助は大きに悦び大助「すりや吾儕の方へお越し下されしか △ソリや何のことでござります大助同士の方々がお召し下されたのぢや △と、どんでもねえ、なア前棒 ×「さうとも、お宮の神輿ぢやあるめえし、軽くなつたり重くなられたりされて溜つたものぢやねえ」いふ時金剛真田氏不破氏と兩人ながら駕籠を拜借いたし居りますぞ」云ひく、駕籠の中からヌツと坊主頭を突き出したから溜りません、前棒

も後棒もワーツと叫んで腰を抜かし、御籠を捨て、一目算に北
げ出した、斯くして金剛坊彦六郎の両人は西源三郎同様に真田
幸村の推舉に依ること、相成つたのでございます、さて是れよ
り御前試合の一條。

第 五 席

御前試合の一條を申上げる前に渡鳥百合之助狐退治のお咄をい
たします、高橋剛右衛門は父高橋虎松の關係から織田有樂齋を
便つて行つたのであるが百合之助と長門守とは少して因縁のな
い間柄でございませぬ、然るに百合之助が長門守の推舉に與らう
といふのはドーいふ理由であるかといふことを申し上げて置き
ませんと、中には百合之助が女であるといふことを申し上げて置
之助に惚れたか、百合之助の方から長門守に据え膳をしたか、

此何方かであらう位にお考えになると智將長門守のお顔に拘
り、百合之助の身持にも關係いたしますから鳥渡其筋合を申し
上げます、ソレを申し上げますと勢ひ狐退治のお咄を申し上げな
ければなりませぬ、恰ご源三郎行成が真田左衛門尉幸村と宰相
山に於て初對面をいたしましたる其前夜でございませぬ、百合之
助が猫間川の土堤をブラリと歩いて居りますと二人の村の衆
が鐵を擔いで話しながら歩いて居ります、△のう太郎助さんや
今頃は夜仕事は出来ませぬぞ、コレで戦争でも初まつてボンボ
ン鐵砲の音がし出すと居らんやうにはならうけれど、戦争にな
つてはお武家さんに畑を荒されるしよ、ドーも二つ一つは好い
ことのないものぢや、
戦争があるのだすれば一方の方だけでも早いこと、併しまあ、ドノ道
や、此頃大阪にはエライ人が雲のやうに集まつてござるげ
なが、誰一人退治下さらんとくろを見るとき、餘ッ程エライ狐

か、集まつたお方が腰抜けか百合コレく、堤から不意に呼び
かけられて二人の百姓は狐ども思つたか、ワーツと聲をあけ
て北へ出るところを百合之助は呼び止め百合怖れるには及ばぬ
身は此小橋の者ちや、△何、此村の者と仰被いますか百合いか
にも村に住む浪人である、△さう聞けばドーやら見たやうなお
方ちや、ナールほど分つた、鹿藏とこの離屋敷を假りてござる
お侍さまちや百合今聞けば狐が住居すると申したの、△へーへ
ー旦那さま、悪い狐が居りましたな、此三四日續けて毎晩の
やうに人が化かされますちや百合地体ソレは何處に住んで居る
のちや、△何處の此處の云ふて、ツイ其處でござりますよ、ソ
レ、向ふに森が見えませうがな、彼の森が産湯の森と申しまし
て、昔お天子様が産湯をお使ひになりましたといふ清水がござ
いますちや、ソレで産湯の森と申しますが、彼の森にソレはソ
レは、性の悪いコレく、さんがお住居でござりましたな、岩助

の悴は其コレく、さんに魅かれて気が抜けて了ひ、近造の女房
は仍且其お方のお世話で何でも身を汚したの手に穢したのと評
判されてト、首を縊りましたよ百合餘ほど悪戯をいたすと
見ゆるの、△ドーして、ドエライ悪戯をいたします、女に
化けるのが十八番でござりますが、此化け方が大層巧いと見え
まして二度も三度も化される人間がござります百合何時頃から
のことちや、△モ一旦那さま、三十年も五十年も住んで居るさ
うで、爺さんか婆さんか何方かは存じませんが、随分古狐、イ
ヤナニ、コレく、さまでござりますよ百合よし、それでは身が
退治て呉れる二人め、滅相もないこと仰つしやいませ、村にお
住居といふことゆえ内々でお耳に入りますかな、實は旦那さま
コレまでにヤレ拙者は武者修業でござるの、ヤレ拙者は豪傑ち
やのと、色々名乗つてござつた旅のお侍さまが今日まで、エ
ーと、彼のお方にアノ人に、三人、五人、六人……ざつと十三

四人ございませうが、其中で裸躰にされてホーの躰で北げ出された鬚武者のお方を除けては、唯の一人も助かつたお方はございませんで、皆お前さん、森の中で首を縫られたり、岩と岩との間へ狭まつてお陀佛となつたり……コト申しちや何でございませうが、皆旦那さまよりは強さうなお方ばかり、ソレが皆ソノいふ次第でございませうがな、お見受けいたしますところ旦那様は男前こそ好いが、力はソレほどにも、エへ、いえ此方は今宵の間退治て呉れる、命あつての物種、殺られんやうになさいませる、男前が好いから百合之助を金と力のない人間やうに思つて居る、百合之助はソノ足で産湯の森へ出かけて行く、此産湯の森は只今とは違つて附近に人家のあつたもので、はございません、木は森々と繁つて晝尚ほ暗く、一條の小徑が其中を通じて在所と大阪の城下との通路にはなつて居りますが

日の中でも一人で通るものはない、三人五人と隊を組まんが怖いと云つて通りません、況して日が暮れてからは誰一人通るものはない、在所から城下へは天王寺の方へ大廻りをしたものでございませう、百合之助は靈刀を一本腰に手挟み、高が悪狐の一匹二匹何程のことやあらんと、夜中産湯の森へ参り、モ一出るか、モ一現はれるかと待つて居りますと、上町の方から一人の武士らしい男がやつて来た、百合之助は悪狐め、武士に化けて来たな、思つて木蔭に身を潜めて見て居ると、武士は右手に白刃を抜いて、四邊をキョロ、見廻して居ります、百合之助は悪狐め、武士は右刀で森を通るとは若し武士であれば臆病武士に相違ない、ソレとも悪狐がアンナ風をして見せるのかも知れぬ、一つ試して呉れやう、思つて木蔭からヌツと現はれ、小徑の上に立ち跨がつて居りますと、足腰をブル、額はせて居る、百合之助は可笑く

て溜りませせん 百合「さては悪狐ではなく唯の人間であつたか、コレ〜 お侍」武士は抜刀を持つたま、武士「い、命だけはお助けを…… 百合」コレはしたり、拙者は貴殿の命を貰ふとは申しませぬ 武士「でもござらうが、貴殿はキキツ子…… 百合」フム、さては拙者を悪狐と思召すか 武士「思召すではござらぬ、キキツ子氏に相違ござらぬ、コレ通り両手を支いてお詫び仕る 百合」はてさて氣の弱い御仁でござるな、ソレでも武士と申されやうか 武士「何と云はれても兎角はござらぬ、命だけはお助けを…… 百合」念の爲めに貴殿の御姓名が承りたい、何處のお武家でござる 武士「武家ではござらぬ、實は播州姫路に於て漢學の師匠をいたしたものでござるが、師匠では正月の餅も搗けませぬにより、何か好い商賣でもあるまいかと存する折柄、大阪城に於て浪人お召し抱えと承り、早速妻子同道大阪へ上り、書物に依つて學んだ兵法を溜々と二時間の間饒舌立て、ござる、ところがソレが大

野治長殿のお氣に入り、早速金五百枚にて召抱えられ、今日で二十五日の間榮華に暮してござつたが今朝のこととござる、城内に於て産湯の悪狐の話が出で、是非共播州の田口先生に御退治が願ひたいと木村長門守が仰せちや、田口先生とは拙者のこととでござるがな、其田口先生、口では百万の軍勢を動かし、舌三寸では悪狐の五六匹は瞬く間に退治してお目にかけるが儲て實際と相成ると足腰が頓えて斯くの通りでござる、今日只今より妻子を引き連れ、播州へ立ち退くでござるにより、命ばかりは平に御容赦、田口播左衛門地上に額を付けて、かくの通り…… 抜刀を捨て、両手と額を地上に置いて居ります、百合「之助は嘆息して百合」はてさて、大阪城では頼んだものをお召し抱えに相成つたものぢや、左様のことでは關東勢を引き受けた曉村殿、溜りもなく落城いたすことであらう、城内には眞田殿、木

るは、コレぞ世にいふ鳥合の衆、關東勢の押し寄せた時が思ひ
やられる、一つ荒膽を挫ぎ呉れん』ツカ〜と側へ寄つて百合
待たう〜
せいで四人、鼻がうにも腰が立ちませぬ、武士さて云ひ甲斐なき者共
ちや、四ツ匂ひになつて身を載せて走れい、百合待たう』云つて
兜を引ッ掴むと、武士はモ一命限りである、兜を脱ぎ捨て、四
ツ匂ひに逃げ出さうとする、百合之助はコン度は髪を毛を掴ん
で百合さて云ひ甲斐なき武士ではある、さほど狐が怖うござる
か、武士、仰せられるまでもござらぬ……百合見受けるどころ大阪
城の御仁と存するが、左様のことで戦がなり申すか、武士戦と狐
は別物でござる、百合敵の軍勢より狐が怖いと仰せか、武士いかに
も仰せの通り……コリや者共、者共、者共は四人とも振れ合つ
て北げて居る、武士手當が欲しうはないか、過分の恩賞を取らせ
ると申すに、頼み甲斐なき者共よな、あ、皆逃げ居つた……

百合お待ちなされ、貴殿のみは逃がしませぬぞ、武士それはまた
如何やうな仕儀で、拙者は貴殿から怨みを受ける覚えはござら
ぬ、貴殿を退治るとはソレは人前の口上、心の中では狐大明神
と崇め居りますわ、百合ソレでも武士と申されるか、武士何とでも
仰せ下され、コレでも毛利家に仕えた砌は、敵の二三十人は斬
つた覚えのある者でござる、今でも四五人の武士を相手にいた
すことは苦には存せぬが、貴殿のやうなき、キツネ氏には聊か
閉口でござる、百合拙者を狐ちやと仰せか、武士人間にお化けなさ
れたものも存する、百合さて臆病な武士ではある、後日の爲め斯
やうに冠らせ、百合念の爲めにお名前が承りたい、武士藤堂半之丞
と申す、百合お通りあれツ、武士辱けなうござる、大身の槍を擔い
で元来た方へ一目算、百合之助は後見送り、百合さほど怖ろしき
悪狐であるか、ソ一聞上は尙ほ更捨て置けぬ、百合之助屹と

退治て呉れる」また木蔭に待つて居ると、コン度は優しい草履の音がして、頭から袷衣を冠つた一人の美人が静々と現はれた年の頃は十八九、夜目にも誠に美形でございませす百合いよく出たな、見たところ高貴の人の姫君らしい、其姫君がお伴も連れず、唯一人此森を通る筈はない、而も夜更けて此森を……コレこそ悪狐の化身に相違ない、いや百合之助が一刀の下に退治て呉れる、靈刀の目釘を濡して突ツ行く手に立ち塞がり百合待たれい」其聲に姫はヒョイと顔を向ける、其顔が女の顔ではございません、悪鬼と云はうか、妖魔と云はうか、口は耳まで裂け、眼は爛々と輝き、色は物凄く青みを帯びてゐる百合さてこそ悪狐、侍ち兼ねたるわ」スラリと抜いて斬つてかゝると妖怪の方でも腕に覚えがあると見えて、袷衣をヒラリと脱ぎ捨てるど懐刀をキラリと抜いて、物も云はず支え止める、一上一下虚々實々、動作が真に法に適つてゐる、百合之助は不思議で溜り

ません百合なるほどコレでは人の怖れる筈ぢや、悪狐とは云へ馬鹿にならぬ、獸類でも年功を経るとコゝまで慥かになるものか」感嘆しながら斬り込み、身を轉し、物の二夕時ばかりも斬り結んで居りましたが、百合之助は面倒とでも思つたか、得意の秘術を出してバツと姿を消し、エイツ、と斬り付ける間髪を容れず、姫暫く」姫は初めて聲を出して懐剣投げ捨て、姫さて見事なるお手際、恐れ入つてござる」云ふ聲は澄み切つた好い聲ではあるが女ではございません、百合之助は手を控えて姿を見せ、百合降参したと申すか、ならば正体を現はすが好い、姫仰せには及ばぬ」云つて何やら紐を解いたかと思ふと、悪鬼と思つたのは假面で鬘と女の服装を脱ると二十歳前後の水際立つた美男でございませす、此時夜は白々と明けたから一舉一動が判然と見える、百合之助は意外に思ひ百合すりや、貴殿は悪狐では……美男いかに、身は木村長門守重成でござる百合エ

「長門」さて、見上げたお腕前、度胸と云ひ剣道と云ひ、其上秘術をお心得の御仁と見た、今、大阪城にても御存じの如き危急の場合、貴殿如き天晴の武人を得んこと百万の味方を得るよりも幾倍でござる、何處の誰方かは存せぬが、お味方下さるまいか、重成、兩手を支いてお願ひ申す」百合之助は慌て、手を持ち上げ百合勿躰ない其お詞、恐れ入つてござります長門是非にお聞き届けが願ひたい、重成兩手を……百合あれ勿体ない……」百合之助はまた重成の手を支え、つくつくと見れば見ると思ふと、其處は女でござります、コレが音に聞いた木村長門守重成様か、五通五勇士の一人とは云ひながら生れ付いたのは女であるから百合之助はポーツとして慌れてゐる長門強てのお願ひ、内府様へ御推舉申上げたい、是非にお味方下されたし、重成兩手を、百合あれ勿体なうござります長門ではお聞き届け下さるか百合

ちやと申して長門重成兩手を百合あれ、勿体……長門お聞き入れ下さるか、重成兩手を百合不束ながら……長門あのお聞き届け下さると、あのお聞き届け下さる……百合何分宜なに、願ひ上げます」コいふ次第で百合之助は木村長門守に推舉されることになつたのでござります、長門守の屋敷へ同道されて、四人の同士のあることを語り、ソレではといふところから柴山左近が四挺の駕籠を持つて迎えに行き、織田有樂齋の使者坂部左藤太と同士二名の争ひをいたしたことは前回に於て申上げた通りでござります、狐退治はドーナつたかど御疑念の方もござりませうからソレを鳥渡申上げます、此産湯の悪狐は此日から四日前、真田幸村の一人大助が退治をいたし、狐の死骸は宰相の木の立の中へ埋めて了つたのでござります、ソレは幸村と長門守の兩人より知りませぬ、ソレで長門守は大助にも幸村にも口止めをして置き、今尙ほ悪狐が居るやうに云ひふらし、新に

召し抱えた浪人の度胸試しの場處といたして居りましたので、
無論長門守は前以て産湯の森へ出張つて参り、木蔭から浪人の
様子を見居ります、若し眞實度胸があつて悪狐の出るの
を待ち受ける者があれば長門守が色々に変装して其腕前を試す
其腕前や度胸に依つて幸村とも相談の上で英断の處置を取るの
でございませう、であるから播州の漢學先生や毛利家に仕へて居
たといふ藤堂半之丞の兩人は無論落第でございませう、百合之助
は狐は退治なかつたのでございませう、長門守に於てソレ以來
浪人の度胸試しを變更に及び、外の方法を取ることに相成つた
ので何時しか産湯の森は夜分でも何の變事がないことに相成り
後に至つても佐々百合之助が狐退治をしたことに云ひ傳えられ
て居るのでございませう、今でも小橋に百合之助の碑が遺つて居
るさうにございませう、以上が百合之助の狐退治のお話、コレより
内府公御前に於て五通五勇士が目覺しい忍術を行ひ後藤又兵衛

薄田隼人、塙團右衛門等の荒膽を抜かうといふ御前試合の一段を
一席伺ひます。

第六席

今日は眞田幸村、木村重成、織田有樂齋の三名から内府様へ五
名の勇士推擧の日とあつて城内の大廣間に大野修理亮之治長、
眞田左衛門尉幸村、木村長門守重成、織田有樂齋、長曾我部盛
親、明石守重、仙石宗也、さては後藤又兵衛基次、塙團右衛門
直之、薄田隼人正兼相と云つたやうな一騎當千の猛者に至るま
で綺羅星の如く居流れて居る、其末座の方には田口播左衛門、
藤堂半之丞も控えて居ります、此兩人は産湯の森に於て百合之
助を悪狐と思ひちがえ「命ばかりはお助けを……」と云つた先
生である、さて一座の席が定まると内府秀頼公お成り、上段の

間へ御着席に相成る、一同頭を下げて居りますと御簾が高く揚がつて御機嫌殊の外麗はしく拜される、すると木村長門守が先づ口を開いて長門田口、藤堂の御兩所、昨夜の狐退治は如何でござつた、此田口藤堂の兩人は何れも大野治長の推舉に依つて新参の浪人者として破格のお手當を戴いて居るものでございませす、田口はッ、木村殿の仰せに従ひ、昨夜産湯の森へ参つてござる、長門ソレは近頃大儀でござつた、して悪狐は出てござりませす、田口儘かに出でございませす、窃窺たる二八の美人に化けて出でござつた長門外ならぬ貴殿のこと、一刀の下にお退治なされ、田口播左衛門は鹿爪らしく進み出て、扇子を信と持ち直し、長門守も幸村も心中では笑止で溜りませせんが、表面では眞面目に聞いて居る、大野修理は自分の推舉した田口であるから自慢の鼻を膨らせて聞いて居ります、田口何さま年功を経たる悪

狐のことにござる、其變化振の巧妙なること誠に以て驚くばかりでござつた、長門御退治下されたか否か、ソレだけ承りたい、田口さればでござる、まづ一同にお聞き下され、拙者昨夜丑三つ頃、ほひ、産湯の森を唯一人で通りか、つてござる、大野治長が太鼓を打つやうに、治長流石は兵學者の田口播左衛門、驚き入つたる度胸にござります、と内府公へ聞けがしに云ふ、播左衛門圖に乗り、田口何さま水も眠らうといふ丑三つ頃とて、森の中は聞として音なく、聞ゆるものは木の葉の葉摺と滾々と湧き出る清水の音、遙かに聞ゆる鐘の音も一段の物凄さを増してござつた、治長聞くさへ物凄いとござる、田口晝尙ほ暗き森の中で、ゴーンと聞える鐘の音はあまり好い氣持でもござらぬが、そこは多少腕に覺えの拙者でござる、妖怪退治は恰と昨夜で三度目でござつた、一度は生國播州に於て長門アコレ、昔物語は後日承はる、昨夜の模様お聞かせ下され、田口さればでこ

ざる、物凄きこと云はん方もござらぬが、妖怪退治には三四回も経験がござれば、悪狐の二三匹何ほどのことやあらんと、悪狐の出るを待ち構えて居りますところへ、一陣の風が颯と吹き起り、血生臭い匂ひがブーンと鼻を掠めてござる。治長「血生臭い匂ひが……さてのう。田口「さてはいよ。出居つたかと、きつと眼を据えて見申すと年の頃二十八九、色白く眉秀でた一人の美男に化けて出申した。長門「お待ち下され、先刻は窈窕たる美人のやうに承つたが。田口「ウンニヤ、美男美女でござる。長門「何方ぢや。田口「美人でござる、イヤ、美男でござる。長門「フム、それから承らう。田口「美男に化けて出申したによつて、おのれ悪狐、唯一ト討と身構えてござると其威勢にや怖れけん、白烟となつて消えてござつた、それより夜の明くるまで森の中に待ち受けられた。と更に姿を見せ申さぬ。治長「出かされた。田口「播左衛門、流石は兵學者でござるぞ。田口「ハーツ。長門守は心で笑ひながらも。長門「して

藤堂氏には「藤堂半之丞は四人の下郎に四方を守らせ、甲冑で身を堅めた豪傑である。藤堂拙者も同じく丑三つの頃ほひ、産湯の森へ唯一人参つた。長門「お伴はござらぬか。藤堂「いや、拙者一人で参つた、悪狐を退治するに伴なぞと、ソんな卑怯者ではござらぬ。長門「して悪狐を退治されたか。藤堂「されば其儀でござる、拙者如何にもして悪狐を退治、功名手柄をいたさんと思ふものから森の中を隈なく探つてござるが皆目姿を見せ申さぬ、これ必定悪狐の方にて遠慮いたしたものがど心得る。長門「御兩所ともお見事な口上。長門守「ホト、嘆息いたしてござる。兩人「何と仰せ……長門「コレといふも畢竟、人を見るの明なき者が君に推舉申上げるの罪。ザロリと治長の方を見て。長門守「は嘆息し、長門「斯やうのことで關東勢を引受けなば、大阪城は瞬叩く間に落城は必然。治長「これは怪しからん。治長「聞き答めて。治長「長門守には何たるお詞ぢや、人を見るの明がないとは拙者のことを

仰せであらう長門貴殿とは名は指さぬ、なれど田口、藤堂兩人の如き似非豪傑を推舉いたされた御仁の事を申すのちや治長、ならば拙者ちや、田口藤堂兩人は拙者が君へ推舉申上げた、それが何故明がござらぬ長門では大野氏には、此兩人を一ト廉の武士とお心得召さるか治長勿論でござる、産湯の悪狐を退治こそいたさね、一人は一刀の下に斬り捨てんとし、一人は悪狐の方にて怖れをなしたるほどの豪傑、ソレでも人を見るの明がないと仰せか長門それが明なき動かぬ証據、何を隠さう、昨夜は身が先に産湯の森へ忍び込み、兩人の様子を逐一見届けてござるわ田口な、なんと……藤堂あの御貴殿が……」田口藤堂の兩人はモ一顔色はございませぬ、治長も流石に驚いて治長貴殿が産湯の森へ……長門勿論でござる、田口藤堂兩人の腕前に少々不審の廉がござつたにより、殊更悪狐退治を頼み入れ森に隠れて様子を探り居るとも知らず、田口殿は抜刀で通行田口へエー

ツ長門越前の武士百合之助を悪狐の化身と思ひちがえ、命乞ひをなされたでないか田口好う御存じで……長門兵學者とは眞赤な偽、實は漢學の師匠でござらう田口それが知れては……長門まつた藤堂殿は一人とは根もないこと、過分の手當を取らせん約束で下郎共を狩り立て、身に甲冑を纏ひ大身の槍を捉げ、四人の下郎に前後左右を堅めさせて怖々と参られたであらう藤堂これにはさて面目ない……長門それさへあるに同じく百合之助を悪狐の變化と思ひ、命乞ひをなされたのみか、中途から引返して命からく逃げ戻つた臆病者ではござらぬ藤堂それまで御存じとはさて油断のならぬ……長門それでも立派な武士でござるか、イヤさ見上げたお腕前と申されやうか藤堂さアソレは、長門いや鎌倉の都合君のお役に立つと思はるか田口ウーン、それは……長門大野氏、それでも人を見るの明があると思召すか治長ウーンと治長も詰つて了つたが、内府公の御前と云ひ

大勢の人前負けては居れませぬ。治長「長門守、貴殿は先程から立派な口をお利きであるが、世には見て来たやうな嘘を誠にやか先に申す者もござるので、それには何か証拠がござらう、ソレを先づ拜見いたしたい。長門「何ぞと云へば証拠呼ば、り、宜しうござる、お目にかけてやう」次の間を向いて長門「佐々氏、これへ、百合「はッ」百合「之助が怖々進み出て、先づ内府公へ一禮、續いて一座へ一禮して長門守の下手に控える、早くも見たのが田口播左衛門に藤堂半之丞の兩人、兩人「ヤ、ッ、其方は昨夜のキ、キツネ氏……」百合「意外な處でお目にかゝる、兩人「コリヤ、はや、何うも……」兩人は頭を掻いて居窘んで居ります。長門「大野氏、先刻申上げた越前の住人、佐々百合「之助とは此者にござる。治長「フム、其奴が悪狐と間違えられた男と申さる、か長門「いかにも、田口藤堂の兩人が悪狐と思ひちがえ命乞ひをいたされた人物にござる。治長「こりや百合「之助とやら」治長は長門守へは云へませぬ。

んから百合「之助へ鬱憤を晴らさうとする。治長「其方は屹度産湯の森に居つたと申すの百合「左様にござります。治長「何用あつて森へ参り居つた百合「小橋の百姓より産湯の森に悪狐が住居をいたし夜な〜通行の者を魅かすと聞き及びました。故、退治て除けんと参り居りました。治長「其方が悪狐を退治んと存じたと申すか……女の如き顔をしてあの悪狐を退治る、フ、フ、フ、ハ、ハ、ハ、顔にも似合はぬ高言を吐くものかな、して美事悪狐を退治たといふか百合「悪狐の出るを待ち構え居ります處へ、コレなる御兩所がお通りがかりにござります。治長「ソレで悪狐の化身の如く装ひ、此兩人の荒膽を抜いたと申すか、不届者め百合「これは近頃迷惑至極、拙者悪狐の化身を装ふた覺えは微塵もござりませぬ。御兩人が勝手に悪狐と思ひちがひをなされたのでござります。治長「何故悪狐ではないと申さぬ、コレ〜斯やうの者ぢやと何故名乗りを擧げぬ百合「失禮な申分ではござりまするが、假にも

内府様御家來ともあらうお方が、悪狐の化身なりとて怖れを抱
かる、には及ぶまいかと存じまする、多寡が獸類のこと、悪狐
の化身と思召さば一刀にお討ち捨てになるべき筈を、反て命乞
ひをなされたが笑止千万に心得る治長な、何といふ、笑止とや
あの笑止と申すか……百合いかに、悪狐に命乞ひをなさるや
うでは、やがて關東勢攻め寄せたる曉は、真先に敵へ命乞ひを
なさる、方々と存じたるにより、其節懇々苦言を差し上げ御兩
人もさこそと思はれしか、暇を乞ふて生國へ立ち去るやう申さ
れたやに存じまするが云ひく二人をチロリと見る、田口も
藤堂も一言もございませぬ、治長は一層厄氣となり治長不禮至
極な其一言、汝の如き青浪人に苦言さる、が如き人物は、此
此治長が君へは推擧いたさぬわ、さほど高言を吐くからは得も
偽ではあるまい、當時の模様を見たものでもあるか、ソレとも
何か証據の品でもあるか、君の御前も憚らず斯くまで高言吐き

し上は、証據なくば其分では置かぬぞ百合お手殿しいお催促、
別に証據といふほどでもございませぬが、武士の風上に置けぬ
臆病者よと存じましたる故、二度と御前へ罷り出られぬやうと
心得、兩人の髻を斬り捨て置きました治長何、兩人の髻を斬り
捨て置いた……此時真田幸村が膝行り出で幸村ソレこそ動か
ぬ証據でござる、大野氏、お調らべあつて然るべく存する、万
一、髻が切り捨て、なくば、貴殿ではない此幸村が百合之助と
やらを其分では許し置きませぬ、もしまた兩人の髻が斬り捨て
あらば、武士としては腰抜け武士、物の役に立つべくも思はれ
ぬにより今日只今より永の暇でござる、上様を欺き貴殿を瞞着
したる不届者、斬つて捨てべきなれど其處は貴殿のお顔もござ
れば、躰よく城外へ追放といたさう、いざ、お改めなされ治長
仰せにや及ぶ」治長が立ち上ると田口も藤堂も兩手で頭を抱え
田口「此附鬚は、その、實は、その……藤堂「毛が短かいにより附

鬚を……」長門守が進み出て長門揃ひも揃ふて附鬚とは、鬚を斬られたに相違あるまい兩人恐れ入つてござります」兩人が兩手を支いて恐れ入つたので治長一言もございませぬ幸村如何ぢや大野氏治長ウーン……幸村大野氏には頼んだ腰抜けを御推擧なされたものぢやの、は、は、は、治長ウーン」幸村は内府公へ向き直り幸村お聞き及びの通りにござります内府彼の者兩人、追放いたせ幸村はッ」幸村が更に下知して田口藤堂の兩人を城外へ引き摺り出させて了つた内府ソレにしても百合之助とやらは見上げた腕前の者らしい、幸村抱え取らせては何うぢや幸村はッ、彼の者こそ、木村長門守が推擧の浪人にござります内府長門が推擧いたしたいとは彼の者であるか、さて容貌に似ぬ天晴の浪人、長門長門はッ内府召し抱えるぞよ長門はッ、有難きお詞、コレ、コレ、百合之助、御挨拶を」百合之助は忝しく兩手を支き百合有難き御詫……内府「オー、忠勤を勵み呉れよ百合は、

「ッ」ところが治長が黙つて居りませぬ治長上様に言上内府何事ぢや治長單は悪狐の化身を装ひ、田口藤堂兩人に怖れを抱かしめたるのみの浪人でござります、それも眞偽定かでございませぬ、然るを長門守の推擧とあつて即座にお聞き届けは、近頃以て聞えぬお沙汰かと存じます」内府公は微笑かに笑ませ給ひ内府すると何か、田口藤堂の美物に舌を焼いたる故、膾を吹いて食べよと云やるか治長「えッ内府入念に越したことはあるまい、コレ、長門、修理之亮が入念にせよと申す、其百合之助とやらに一藝をやらせ見よ長門畏つてござります」長門守は百合之助に傳える、百合之助は畏つて百合では眞のお目覺しに鐵輪の藝をお目にかけます」云つて一禮するや否や、エイッ、聲をかける大野治長の首に鐵輪が箝つた百合他人では仕掛があるよ仰せられまいものでもございませぬによつて、大野様に締め加減を味はつて戴きます」治長は狎ころのやうに頸へ鐵

輪を倣められ、ウーン／＼唸つて居ります。百合殺す活すは私の心次第、大野様、御所望とあらば唯一聲で呼吸の根を止めます。治長「ソ、ソ、ソレには及ばぬ、ウーン、ウーン、ウーン、苦しい、百合後で彼れ位ゐなごことかと仰せござりましては心外に存じます。故、些と厳くいたします、エイツ」聲と同時に治長は飛び上つて、ウーン／＼今にも死にさうな聲を出して廣間の中を狂ひ廻つて居る。治長「ウーン、苦しい、もう結構ぢや、ウーン、百合、御遠慮には及びませぬ、コレでも手加減をいたして居りますので、治長「分つたく、好く分つた、ウーン助けて、助けて呉れ、百合命乞ひとあらば中止にいたします、エイツ」鐵輪がバツと脱れたので治長は咽喉を擦つてゐる。治長「あア苦しかつた、さても酷いことをする奴ぢや、あれが其方の一藝か、百合眞のお目覺しでございませぬ、何なら今一曲お目にかけてませうか、治長「も、も、結構々々、此上やられた日には殺されて了ふ。内府「何うぢや修理、腕前のあ

る者と思ふか、治長「ウーン、ヘイ、ま、ま、一藝は有る者と心得ます。内府「まア、／＼といふ位ゐのことか、治長「頸輪の藝は、大道藝人の手品師でも仕る。百合之助は聞いて口惜しくて溜りませぬ、長門守に向つて百合「今一度お試しを」長門守が承知して内府へ言上、内府「内府からコン度は直接百合之助へ下命があつて、更に百合之助が驚天の秘術をお目にかけるといふお咄。

第七席

内府から直接の御下命があつたので百合之助は委細畏り、靈刀を片邊に屹と身構えらるとまたしても大野治長が口を出して治長「戰場に手品は不用である、相手なき藝は空論も同然、果して主君の役に立つか否や、相當の相手に吟味させるが好うござらう。長門「それも一理あること、誰彼と云はんより、大野氏、御貴殿

御相手なされては如何ぢや」治長は鐵輪に懲りて居るから相手に
 にならうとは云ひません治長身は一藝の者でござらぬ」一藝の
 者でないとは策を惟握に講ずる大將の資格であるといふ意味で
 ございます、長門守は心中生意氣などは思つたが色にも見せず
 長門では、武人の方々にお願ひいたさう」一座を見廻はすと、
 △拙者が相手をいたさう」突と立つて百合之助の前に座つた
 のが薄田隼人正兼相、見るから鬼をも挫かん豪傑である、一座
 は一齊に一同それこそ好敵、これは見物ぢや」大野治長は大悦
 びである、心の中で「いかな長門守の推舉でも薄田にかゝつて
 は一ト溜りもあるまい、さすれば百合之助は一度で失敗、長門
 守も面目を失するワケぢや、人を呪はゞ穴二つ、身の推舉した
 者を追放に遇はせたから、這度は長門の番に廻つて来たのぢや
 あア愉快、コレは面白い」思ひつゝ、膝を進み治長薄田氏、確乎
 なされよ」薄田は性來の豪傑である薄田勝つも負けるも武士の

習ひ、力のありたけは出すつもりでござるが、相手が強ければ
 手前が負けぢや、手前の方が強いと百合之助殿とやらが負に相
 成る、喃貴殿」解つたことを云つて百合之助に咄しかける、百
 合之助は愛嬌好く黙禮して百合では、小手調べとして居合ひを
 仕らう薄田好からう」薄田は袴の股立を襄げるやうにして一ト
 膝退り、両手を拳に固めて兩膝に構え薄田さア参られ百合宜し
 うございますか薄田好いとも百合やッ薄田何をッ百合エイッ、
 薄田ウーン」薄田は身動きもしません、手に汗を握つて居た一
 座の面々、コレは如何にと眼を睜つて見て居る、中にも治長は
 氣を揉むこと一ト方でない治長薄田氏、何となされた薄田何と
 も彼とも早ヤ各々方、コレを御覽下され」一座へ見せ付けたの
 は両手である△何となされた○何うかなされたか薄田か、
 金縛りにされてござる、これでは手も足も出たものではござら
 ん△これははしたり×いや、これは何うも」一同顔見合せて

少時は聲も出ません、内府公は感嘆してお在す内府さま美事なものであるの薄田美事か何かは存じませんが、コレでは拙者が苦しうて叶ひませぬ、佐々氏、降参てござる百合それでは、エイツ」術を解いて百合不禮の儀は平に薄田何の、不禮も糸瓜もござらぬ、が、貴殿は忍術を心得居らるゝと見ゆるの百合ほんの聊かでござります薄田道理で叶はぬ筈ぢや、と見ゆるの内では薄田隼人が百万人か、つたところで無役でござる」内府の方へ向いて薄田上様へ言上、天晴の手の内と見申す、ズンと奮發んでお召し抱えのほど願ひ上る、薄田が此口上であるから一座異儀を唱えるものはございませぬ、あれば治長位のもの、眞田幸村木村重成はモ一前以て分つて居るので、豫定の處まで来たワイと思つて居る、内府に於かせられても無論重く用ゆる考えで居られる内府隼人、大儀であつた、重く用ゆるのであるぞよ」薄田も満足して着席する、ソコで百合之助は大に面目を施こし

長門守の後に控えて居ります内府コレく左衛門幸村ハツ内府其方も推舉するものがあるやう申し居つたの幸村左様にございませぬ、織田有樂齋殿は一名、拙者は三名にございませぬがコレ皆百合之助と同様、忍術の心得ある者にございませぬ内府何五名共忍術の心得ある者と申すか幸村御意にござります内府すると、其方の家來にも何とか申す者が居つた、あれと同じものであるか幸村才藏、佐助の兩人でござりますか内府さうぢや、佐助と才藏である幸村イヤ、彼等とは一段趣が異なり、例へば黄金作りの御佩刀と、白鞘の匕首ほどの相違がござります内府才藏佐助が白鞘の如きもの、五名の者が黄金の太刀の如き者ぢやと申すか幸村御意の通り内府さて、上には上のある者、して、五名は五名ながら百合之助同様の術であるか幸村なか、もちまして、五人五色、五士五様の術にござります内府何、五人五色五士五様との幸村ハツ内府ソレはまた如何やうに異ふと云や

る幸村火遁、水遁、木遁、金遁、土遁の此五遁の術、悉く揃ひ居ります内府何、何、なんと云やる内府公は膝を進ませられ内府五遁の術者悉く揃ひ居ると……幸村幸村ハッ内府ソレを悉く予の臣家に加えなば、予の爲めには股肱、豊臣家の爲めには家寶であるの幸村御意の通り、關東の軍勢幾百万押し寄せ参らうとも、更に怖るゝことござりませぬ内府オ、げにもちや、して、其五名を其方ら三名が推擧し呉れる出かしたり三名、過分に思ふぞ幸村初め長門守有樂齋の三名は聲を揃えて三人ハ、ハッ内府直ぐに呼べ、直ぐに呼べ幸村心得候幸村が次の間へ通すると源三郎、剛右衛門、金剛坊、彦六郎の四名、百合之助の下手へ列んで五名共一齊に頭を下げる五人ハ、ハッ内府皆近う五人ハッ内府頭を上げ五人ハッ内府幸村、名を知らせよ幸村心得候、此方に控えましたるが五術五遁の第一位、火遁の

術者高橋剛右衛門道照、次が水遁の不破彦六郎重治、次が木遁の金剛坊、次が金遁の佐々百合之助美政、次が土遁の名人西源三郎行成の五名にござります内府揃ひも揃ふて美事な格服、五名の者五名ハッ内府今日より其方ら五名とも秀頼が股肱であるぞよ五名身に餘つたる其お詞、屹度忠義を擧ぐるでござりませう内府幸村、長門、有樂齋には各五百石の加増、此五名の者には黄金二百枚を遣はす三人ハッ五人有難く存じ奉る八人が一齊に頭を下げた、不平なのは治長でござります治長申し上げます内府何事ぢや治長明智にまします内府様とも覚えぬお仕打ます内府眞田木村の口上にて、直ちに黄金二百枚にお召し抱えは些と御輕卒な御所置かど心得ます内府口上のみで抱えたではない、百合之助の手並は其方も見つらん、五名とも彼の者と大同小異である治長それが御輕卒と存じます、一を聞いて十を悟るは事にこそよります、其四名の中に、如何やうの者が雜

り居るやも知れませぬ、現に不破彦六郎と申すもの、彼の弱輩の如きは拙者泉州堺に滞在の砌、召し抱え呉れど願ひ出たものにござります、其際、拙者は十人扶持と値を踏んでござります然るに黄金二百枚とは……内府何其方の手へ頼み込んだ者も居ると申すか、彦六郎が口を切つて彦六郎恐れながら言上、其儀は斯くくかやうの次第にござります、黄金七袋、上様の御用に相立たばと存じ内府何、黄金七袋を彦六郎其際、十人扶持で召し抱えんとのお詞、拙者耳にもかけず立ち去つてござります、内府「コレ」治長「はッ内府其方は黄金七袋を何としたの、治長「ウーン、その儀は……内府何としたと申すに治長「その者よりの献納、申し遅れてござります内府「手落であらうぞ治長「はッ内府以後心して好からう治長「はッ」治長は三々の躰である、内府公は五名に向ひ内府「予は其方らの手腕を信するものぢや、なれど色々差出口をいたすものがないとも限らぬ、

さすれば其方らも心苦しからんのみならず、五遁五行の術は予も一度目前に見て置きたい、大儀であらうが何うちや、予の徒然を慰める心で、五人五色の術を使ひ分けて見せぬか五人「ソレこそ吾儕より望むところにござります内府「何といふ、聞き届けると申すか、過分々々では幸村、其方が万事の差圖役であるぞよ幸村「畏り奉る」幸村は心得て一番に不破彦六郎を呼び出し、幸村「不破氏、年輩からと云ひ、十人扶持の雪辱として、なッッ好うござるか、先づ貴殿から彦六郎心得申した、彦六郎はズツと進み出で彦六郎古手調べといたし眞の一曲「エイッ」聲と共に一本の水柱が矢の如く治長の鼻柱へ、ピシヤー治長「あ痛い」飛沫が顔一面に散つて水が襟から懐中へ滔々と入り込み、見る間に全身ズブ濡れとなつて治長「あーぶるく、あーぶるく」冷たいのと氣持悪さにガタ／＼顫え出した治長「おのれ不届者、場處もあらうに君の御前に於て、水を引ツかけるとは奇怪至極、其處

始め一座は感嘆の聲を断ちません、治長だけ顔を膨らせてゐる
 身六「それではこれからお目にかけます」云つて屹と身構え、満
 身の氣力を一つに集めて、エイツ……云ふよと見るや、何處か
 ら湧いて来たか大河の堤を決したる如く、濁水が滔々としてお
 庭へ流れ込み、庭石の邊でグルグル渦を巻いて居りましたがッ
 レが次第に椽を浸し、床へ上り、廣間の中へドレドレと流れ込
 んで一座の膝まで没するやうになつた、障子は脱れ、箕盆は浮
 き上がり、恰と内府公御座所の際まで水が溜つて来た、コトなる
 と氣持が悪く、内府公御座所の際まで水が溜つて来た、コトなる
 立ち上つて治長「コトは不届き、いかに忍術とは云へ御前を憚らぬ
 此水は何事、お控え召され、控え居らう」水の中に突ツ立つて
 プー、云つてゐる、其間水は段々増えて上段の間の秀頼公の
 お膝が水に浸つた、曲祿がフワリ、と浮く、流石の秀頼公も
 お立ち上りになる、内府公がお立ち上りになる位であるから

に直れ真二ツに……」刀の柄に手をかけて既に彦六郎を斬らん
 とするを、幸村が突と支えて幸村「これは大野氏、御前も憚らす
 何事でござる、氣でも狂ひましたかな治長「氣は狂ひ申さぬが拙
 者は水を浴びせかけ幸村「誰が水を浴びせましたな治長「其處なる
 小童でござる、汝ツぶる、幸村「これははしたりブル、
 顛えて居らる、さては癪癪の氣味で發狂なされたな治長「何が發
 狂、御前も憚らす拙者に水を……幸村「先刻から水々と仰せられ
 るが、何處に水がござる治長「コレを御覺下され胸から下腹へか
 けてズブ濡れでござる幸村「何處に濡れて居りますな治長「此處……
 オヤツ、今まで水に濡れたと思ひしに幸村「何處に一點の飛沫さ
 へか、つては居らぬでござらぬか治長「はて不思議な」治長はケ
 ロリとして立つてゐる幸村「貴殿夢でも見られたのでござらう、
 は、ハ、ハ、一座もドツと笑ふ、治長は顔から火の出るほどに赤
 面して座に直ると彦六「コレが眞の小手調べでございます、内府

下段の間の一座は殆んど皆立ち上つた、立ち上らぬのは眞田幸村と木村長門守それに五遁五勇士位ゐるものである、中にも後藤又兵衛基次は氣が短いだけに赫と怒り出した又兵衛眞田氏、コレは何事でござる、假にも御座所を濁水に浸すと不禮にも不禮とも云はうやうなき奴、彦六郎とか申す奴、拙者一掴みに掴み殺して呉れる、薄田隼人まで彦六郎をクワツと睨め付けながら氣持悪さうに立つて居ります、無理はございませぬ、廣間は一面の海と相成り、火鉢の火も消え袴から衣物がビショ濡れである、座つて居る眞田木村の兩名に五名の勇士は頭からズブズブと水に浸れて居るので遂には長門守まで立ち上らうとした、ど、水の中に、エイツといふ聲がして彦六郎が呼吸をスーツと吸ひ込むと、水は忽ち消えて四邊は元の廣間のまゝである、一同啞然として顔を見合せて居る、△「オヤ、今まであつた水が霧か霞のやうに消えて了つた、△「それにしても曇は腐るでござ

らう、あれだけ水に浸つては腐……、オヤ一向濡れて居りませぬぞ、口袴も元のまゝでござる幸村は、コ、ゾと思つて烈火の如く怒つた後藤又兵衛に向ひ幸村後藤氏、小用にでもお立ちか、又兵衛は立つたまゝ、キマリ悪さうに又兵衛ウーンニヤ、鳥渡の何でござる幸村廣間を水に浸した不禮者と仰せられたが、何處ぞ濡れたところでもござるかな、又兵衛ウーンニヤ、ゆ、夢でござつた幸村「ホ、貴殿は君の御前も憚らず居眠りをなされたか、さもなくば夢を見らる、筈はない、ソレこそ不禮でござらう、又兵衛ウーンニヤ、拙者は眼を開きながら夢を見るのが癖でござる幸村「妙な癖がお有りぢや喃、又兵衛ウーン、コン度は治長に向いて幸村「大野氏、貴殿も夢を御覧なされたと見ゆるの、治長「ウツ……、幸村「貴殿も後藤氏同様、眼を開きながら夢を御覧なされるが癖でござらう、治長「ウツ……、幸村「イヤ、貴殿は喋りながら夢を御覧なさるが癖でござらう、わツは、治長「ウーン……、内府公は感

嘆斜でございませぬ内府さて見事なものぢや、幸村、予も眞の
出水かと思ひし位のであるわ幸村、恐れ入り奉る内府、コレ、彦
六郎とやら彦六ハツ内府、其方は今日より浪がしらを以て定紋と
せよ彦六はハツ内府、當座である小刀を取つて手づから彦六郎
へ遣はされる、面目身に餘つて彦六あり難く頂戴……」芝居で
あるとチョンと木の頭が入つて幕にならうといふ處でございま
す、生憎幕の持ち合せがございませぬから此扇子で御免を蒙り
ます、チョン、バラ、これにて鳥渡休憩。

第八席

エー引き續き五通五色の使ひ分けを御聞きに達します、彦六郎
に次いで出ましたのが木通の怪僧金剛坊、幸村上様へ言上、此者
は木通の術にございませぬ、其お意で御覽を内府、何、木通である

か、ならば先刻のやうに水浸りにはいたすまい金剛、御安心下さ
りませ、拙僧のは至つて隠當にござります幸村に向ひ、金剛、試
合を一本お目にかけていと存じます幸村、ソレは思ひ付きぢや、
一座を見廻はし幸村、誰方か一本お立ち合ひを、相手が相手だけ
に誰一人相手にならうといふものがございまん、すると後藤又
兵衛基次が立ち上り又兵衛、拙者が立ち合ひいたさう幸村、コレは後
藤氏、好敵手でござるソコでお庭前へ假道場を構え、木刀を
二本、兩方へ置いて金剛坊と後藤又兵衛が左右から進み出る、内
府、公大變なお機嫌である内府、コレは面白からう、又兵衛も確乎
いたせよ又兵衛、忍術か遁術か存せんが、多寡が枯木の如き老ひば
れ坊主、又兵衛負けて相成るものか、御覽下され、今の水責め
の敵討ちをいたして呉れます、さア來い金剛、よろしうござるか
又兵衛、好い、金剛、ヤツ、木刀を把つて立ち上つたかと思ふと、
木刀だけが下段に構えて金剛坊の姿は皆目見えませぬ、其癖ヤ

ア、ヤアといふ聲は絶えず聞える、此劍道と申しますものは御案内でもございませうが、相手の眼を見て打ち込みもし防ぎの構えもいたすので、木刀には少しも目をつけられないのございませぬ、初段何段といふ先生方に相成りますと、相手の眼使ひで二タ手先が分るさうにございませぬ、△眼をア、使ふからお面と来て小手を取る意ぢやな、それでは此方は面をコトよけて小手を透して、突きて一本取つてやらう」チャーソンと仕組が先へ出て来て了ひます、下手な先生になると木刀にばかり氣を取られて居ります、×アノ木刀め何方へ呉るか、ソリーや来たお面はやらんぞ、ソリーや来た小手、イヤ變つたお胴へ来た、突きへ来た、ワーツ負けたア」コレでは負けるに決つて居ります、木刀は死物で心がない、心を読むことが出来ませんから打ちかけた處でヤツと小手へ来るのか、お胴へ来るかど合點が出来来る、ソんな時に防ぎの用意をしたところで間拍子に合つたものでは

ございませぬ、ところが、又兵衛と金剛坊の試合ひは相手の姿が見えないから眼使ひを読むことが出来ぬ、勢ひ木刀の動きに氣を付けるより外に道がない、コレが誠に便ない、ヤイヤと聲だけで木刀が上となり下となる、ボン／＼防いで居るもの、打ち込むことが出来ませぬ、けれど又兵衛も負けん氣の豪傑、又兵衛、卑怯者め、身柄を隠して木刀だけで来るな、コンなことなら相手にならうと云はん方が勝であつたが、コトなら俺も男ぢや、假にも後藤又兵衛ともあるものが枯木坊主にやられて溜るか、さア来い」上段に構えて相手の木刀を叩き落さうと考へて居る、ところが相手の木刀がなか／＼叩かれて居りませぬ、小手一本お面はドーちや又兵衛、どつこいソトは問屋が御さんぞ、突きは何うだ、横手一本……又兵衛、まだ右手があるぞ、糞ッ、それでは後方から背中を一本、又兵衛、ソんな法があるかッ馬鹿野郎、ソレでは上から脳天をお突き、又兵衛、脳天へ突きちやッ」

「下へさがつて股倉を突き、又兵衛、飛んだ處から突いて
來居つた」木刀だけ空を舞ふので身輕なこと夥しい、前から來
るかと思ふと後方へ轉じ、後方から來るかと思ふと上から突い
て來る、上でも横でも、やッて來いと又兵衛、厄氣となつて相
手になつて居ると、下から股倉を突いて來る、ソンの法は劍道
にはございませぬ、ソ一かと思ふと宙をキリ、錐のやうに舞
ふて又兵衛の眉間へ突いて來る、いかな又兵衛もへトに弱
つて了ひ、タヂくとなつた處へ付け入つて「御面一本……」
聲と同時に見事に一本お面をやられて、又兵衛呀ッと思つて見
ると金剛坊は木刀を高く上げて勢よく構えて居ります、何時
何處から出たか少しも分らない、又兵衛腹が立つて溜りませぬ
又兵衛姿を隠して木刀だけで打つて來る法があるか、ソレさへあ
るに偶々御面を取つたと思つて大威張りで姿を出してゐる、負
けたら其ま、雲がくれをする意だらう、卑怯未練な生糞坊主

後日のため、一して呉れるわ」鬼をも挫ぐ兩の腕に、満身の力
を罩めてグツと金剛坊の坊主頭を引ッ掴んだかと思ふと、坊主
頭がバツと消えて後方の方で金剛後藤氏、此處でござる、又兵衛
を小癩な、後方へ飛びかゝると又兵衛の頭の上で、金剛後藤氏、
貴殿の頭の上でござる、流石に又兵衛も弱つて了つた、又兵衛あ、
不敵な奴も居れば居るものぢや、又兵衛、閉口仕つた、負けん
氣の又兵衛が閉口したと云ふので一座はドツと笑ふ一同さすが
の後藤氏も閉口したと云ふので、又兵衛、閉口仕つた、負けん
金剛坊が又兵衛の手を把つて、金剛「まづ、と元の座へ直し、金剛
まことに恐縮、平に御容赦を、又兵衛心配ない、又兵衛はコレだけ
の男ぢや、後に根は残さぬ、金剛「それで拙僧も安堵仕つた」コン
度は内府公へ、金剛「唯今のはホンのお慰みでござります、今一度
御覽を、エイッ」聲をかけるのと下段の間の天井が段々下へさが
つて、居列ぶ者の頭の上まで落ちて來た、スワ一大事と一座が

両手を上げて天井を支え止めんとする、其形が宛がら鉢を捧げ
た置物でございませ、金剛坊隙さすエーイ、全身に力を籠める
ど一座が顔を朱のやうに赤くして、ウーン、ウーンと力みな
ら天井を支えて居る又兵薄田氏、貴殿も支え居らるゝか、斯ば
かり重い天井とは存せなんだ、ウーン、薄田如何やうな理で天井
が落ちたでござらう、瑞氏、地震でも揺つたでござるか、瑞左
様かも知れぬさなくば斯やうに不意に天井の落ちる道理がござ
らぬ、ウーン、ウーン」モ一好い頃と金剛坊、エイツ、いふか
と思ふと天井は元の如く上つて了ふ、けれど薄田と又兵衛とは
まだ両手を揚げて居ります又兵衛何か方法をいたさんことには
拙者らが此手を放さば、一座は悉く板と相成つて相果てるで
ざるぞ薄田いかに左様、吾々が生きた肉柱となつて居ればこ
そ、各々が助かり居るでござる、万一此手を放してもいたさう
ものなら、一座の面々は壓力が利いて人間の漬物が出来申すわ

ウーン、ウーン、ソレを御覧になつた内府公、内府コレ、又兵
衛に隼人の兩人、兩人ウーン、はッ内府心配いたすには及ばぬ、
天井は早や元の如く成り居るぞよ兩人な、なんと仰せ、天井が
元の……ヤ、ツ、こりや何うちや内府大儀であつたの、其方ら
兩人の蔭で皆の者が漬物にもならずに濟んだのであるぞよ兩人ハ
一ツ、兩人は汗と汗を拭いて居ります、内府公御感一ト方でご
ざいませ、内府「さて、怖ろしい術ではある、金剛坊とやら」
金剛「はッ内府其方は今日より丸に木柱を以て家紋といたせ、金剛」
ハ一ツ内府コレは當座である、金銀に寶石を象徴した美麗なる
印籠を取つて手づから金剛坊に賜はつた、金剛坊面目をほごこ
して引き下る、次に現はれたのが火遁の名人高橋剛右衛門道照
でございませ、幸村火遁の術使ひにございませ、内府「フム、それは
見物であらう」内府公は今か今かと待つて居られる、けれど剛
右衛門は少しも初めさうな様子にはございませ、幸村剛右衛門、

御詮でござるぞ」ソレでも剛右衛門は身動きもしない幸村「コレ
 剛右衛門、何としたものぢや」剛右衛門は黙つてゐる、治
 長がまた口を出す治長「さてこそ似非者が糺り居つた、これぢや
 に依つて身共が御試しあるやう申上げたのぢや幸村「ソレ、かや
 うに申すものが出て来た剛右衛門、お始めあれ、まだ剛右衛門
 は俯向いた切返事をしない、する間に奥殿の方が俄に騒々しく
 なつて、淀君お附きの女中が二人まで走つて来た、二人とも裸
 足のまゝでございます二人「申し上げます」と二人が両手を支く
 内府「何事ぢや二人唯今御寶物庫より出火、火は炎々と燃え上り
 早や一ト棟を灰にいたしてござります内府「何、寶物庫が出火と
 な、ソレぞ一大事、物共」一同はスワこそと一齊に一同心得ま
 した」後藤薄田塙は云ふに及ばず、真田木村まで立ち上つた、
 中にも大野治長は狼狽のあまり廣間を駈け廻り治長「大事ぢや大
 事ぢや、一大事ぢや、寶物庫が焼けて了へば千枚分銅も熔ける

であらう千枚分銅が熔けて了へば、戦争も何もあつたものでな
 いスワこそ一大事、大變な儀ぢや、全く大變に相違ございませ
 ん、一同我を争ふて駈け行かんとするを剛右衛門「暫く」と剛右
 衛門が押し止め剛右「お騒ぎあるな拙者瞬間に消し止めるで
 ござります内府「何、消し止め呉れるか剛右「御安心あらせませ」
 云ひつ、寶物庫の方を向いて九字を切ると、火は忽ちに消えて
 烟一つ出なくなつた、すると二人の女中がまた出て来て二人「御
 注進内府「何事なるぞ二人「火は只今消えてござります内府「何
 火は早や消えたと申すか二人「御意にござります、御免」と走つ
 て行く内府「剛右衛門とやら、手柄であるぞ、ぢやが修理」修理
 とは大野治長のことでございませ、治長は泣かぬばかりの顔を
 して居る内府「修理、寶物庫が焼けたとあつては、全く以て大事
 であるの治長「大事も大事、一大事にござります、一番から十番
 まで、何の庫一つ焼けましても、二十三万の損害、關東勢を

引き受け二三年は籠城と覺悟の矢先、莫大の損害は内府様御運
のほごが……内府はて、容易ならぬことに相成つたわい』する
と剛右衛門が両手を支き、剛右衛門ながら言上、其御心配には及
びませぬ内府何、何といふ剛右衛門御寶物庫は一番より十番まで、
皆無事にござります内府コレ、剛右衛門、予を慰めんとの其
方の志は嬉しけれど、ソレは反て予の嘆きを増すのみぢや、一
旦焼けたる庫が何條無事にてあらんや剛右衛門御安堵あらせられま
せ、剛右衛門無事ぢやと申し上げますれば、無事に相違ござり
ませぬ、治長がまた口を挟み、治長たわけたことを申すな、汝が
術にて火を消し止めたりとて、一旦焼けたる御寶物庫が、いふ
時また二人の女中が走つて来て二人申し上げます内府何事ぢや
二人御寶物庫は一番より十番まで、皆無事にござります内府な
に、なに、何と申す二人火の手が上つて一ト庫燃え盡したと見
ましてござりまするに、不思議にも壁一つ焦げ居りませぬ内府

何、壁一つ焦げ居らぬと……二人いかにも左様、御安心まし
ますやうとの淀様御説、御免』と走つて行く内府これは何とし
たこと……』治長も狐に魁まれたやうな顔をしてゐる、剛右衛
門除るに口を開き、剛右衛門これ皆拙者が不熟なる火遁の術、焼けた
りと見えまして、消したりと見えまして、皆、術に依
つて然る儀にござります、内府様始め一座の方々を騒がせ奉り
し段、平に……』兩手を支いて詫び入つたので一座の驚き
は格別である、殊に内府様は膝を打つて内府はてさて、驚き入
つた火遁の術、でも怖ろしいものぢやのう剛右衛門ハッ内府斯かる
術を心得居る上は、百万の大敵を火責めにするは容易であらう
剛右衛門仰せまでもございませぬ内府敵若し城の四方に火をかくる
ども、消し止めんことまた容易であらう剛右衛門の通り内府フ
ム、出かした剛右衛門、其方は今日より菱に紅蓮を以て家紋と
せよ剛右衛門ハッ小姓の持った太刀を手づから賜はり内府當座で

あるぞ剛右「辱なく頂戴……」コレも面目を施して引き退る、次
 が士遁の名、西源三郎行成である内府士遁の名士か、コレ亦
 見物であらう、幸村が進み出で幸村「此者は我が日本國に於ては
 唯一人の名士にござります、先日拙者出丸を築きまします際、百
 餘人の人夫にて晝夜兼行いたしましますも、十日を費しまします
 穴を唯僅かに一刻にて掘り抜き呉れましたる名人、左様に御覽
 下されたい」功能を述べ立て、源三郎を紹介いたします内府ソ
 レはさて珍重の者ぢや幸村「左様にござります、就きましては剛
 右衛門、彦六郎の如く、目覺ましい術にはござりませぬ間、豫
 め御承引置かせられますやう内府「よい、源三然らば御免を」
 一禮してバツと消えらると、お庭の大石唐籠がヒョコ、動き出
 した、△「アレ、御覽せられよ、庭の唐籠が運動を初めてござ
 るぞ、×「ヤ、コレは何うぢや、ソレ椽前まで動いて参つた
 ○「ピヨン、飛び出してござるわ」ソレと見た塙團右衛門が

豈夫コレが術であらうとは思ひません、塙おのれ妖怪「スツク
 と立ち上つて唐籠を一つ掴みかゝる、此團右衛門は御案
 内でもございませうが藝州廣島に於て不能入廁といふ化物の出
 る廁へ入り、妖怪を掴み殺した経験がござりますから、掴
 み加減は誠に上手でござります、どころが唐籠の方でも却々足
 が早い、ウンと手を延ばすとビョイと飛びのく、むんづと組み
 かけるとポイントと空を飛んで行く、なか、掴めない、鯉掴み
 より少し六ヶ敷い、團右衛門クワツとなつて来た團右「おのれ君
 前一座の前で、此團右衛門を廻り居るか、憎くき妖怪、いでッ
 ど両手を大の字に開き、呼吸を計つて唐籠を一つ抱きと抱き付
 いた團右「さア占めた、いかな妖怪でも團右衛門には叶ふまい、
 さア正体を現はせ、やい化石」イクラ云つてもウンともスンと
 も云はない、ソレも其等でござります、源三郎はチャーンと元
 の席へ直つて、高見の見物をいたして居る幸村「内府様へ言上、

内府「何事ぢや幸村今、アレなる唐籠の動きましたるはコレなる源三郎の術にございます内府さうであらうの、予も大畧察し居つた幸村既に術を中止してござります故、端に捕はれたのでございます、さもなくば決して手には了えませんが内府「フム、それ故、團右衛門が捕えたちやの、さうとは團右衛門力瘤の入れ損であるの幸村御意にござります、ソレとは知りませんが團右衛門は一生懸命に石唐籠へ拳固を入れて居る團右正体を現はせやい化物、コレでも正体を現はさぬか」ガーンと拳固を入れて自分で痛がつてゐる、石へ拳固を入れるのだから溜りません、指の皮が剥けて血がダラ／＼流れてゐる、源三郎見兼ねて側へ進み源三「妖怪ではございませぬ、コレは拙者の術にございます團右「何といふ、貴公の術でコノ唐籠がビヨン／＼動いたと申すか源三「いかにも左様で團右「馬鹿なことを申せ、いかな妖怪でも奇術でも此唐籠が動くものか、馬鹿な」全くソレほど重い唐籠

である内府「まことにさうぢや、コレ／＼團右衛門、其方には其唐籠は持ち上らぬか團右「以ての外でございます内府「さうあらうの、その唐籠は故太閤殿下が、紀州より馬五十頭、人夫百八十人を雇ひ、漸く庭へお据えになつた唐籠である、コレ／＼集人薄田「ハッ内府「其方では上らぬか薄田「何程のことや候ふべき」薄田「隼人が立ち上つて庭へ下り、團右衛門に代つて持ち上げやうといたします、端薄田氏、なか／＼持てませぬぞ薄田「なんのこれしきな石唐籠、朝飯前で、ウーン、ウーン、端朝飯に廁へでも参られたと仰せか、切とウーン／＼仰せぢやな薄田「ウーン何のこれしき、ウーン、端「如何なされた薄田「察するに空腹の所爲でござらう、鳥渡食事をして参る」躰よく引き退る團右「は、兵衛は先刻から手に一杯汗を握つて居りましたが又兵「何程のとやあらん」立ち上つて庭へ下り、唐籠を抱えて見たが持てま

せん 團右「貴殿も御空腹の所爲でござるな 又兵拙者は昨夜過して
ござれば 團右「ソんなことはまさか申しません、 兎に角豪傑三人
が交るゝ持たうとしたがピクツともしない石唐籠 源三「鳥渡拙
者に」 源三「郎がバツと消えるときしも重い石唐籠が、 張子かな
んぞで拵らえたやうにフワリ」と浮き上り、 今ならば間が好
い節につれて踊り出さうといふ有様である、 厭だいやだよ、 ハ
イカラさんは厭だ、 頭のド天井に蝶螺の壺焼ナンテ間が好いん
でせう、 トツトコトンのトン、 拍子に合せてピヨンコ、 踊つ
て居ります、 コレには流石の豪傑 團右衛門、 後藤又兵衛、 薄
田隼人の三人とも舌を巻いて驚仰いたし三人「ても、 術とは
怖ろしいものぢや」と負けん氣の角を折つて了つた、 三豪傑が
コンな調子でございますから内府公の御感は一ト通りでござい
ません 内府「眞田が出丸の抜穴を掘つたと云ひ、 今また此大力を
現はしたる段、 天晴の妙術、 源三「郎とやら 源三「ハツ 内府「今日よ

り其方は石の二重を似て家紋とすべし、 これは當座である」と
高さ一尺ほどの瑪瑙へ彫刻した太閤殿下の像を賜はり、 これま
た面目をほどこして引き下る、 唯一人百合之助が恩賞に預つて
居りませんので長門守が進み出で 長門「我が君、 百合之助の秘術
今一度御一覽、 内府公も一人だけ繼子にする考えはございませ
ん 内府「悦んで見るぞよ」そこで更に百合之助が秘術を盡さうと
いふ一段、 次席に於てお機嫌を伺ふ。

第九席

木村「長門守の取なしで御前近く進み出た佐々百合之助美政、 内
府公へ一禮すると遙の末座へ退つて屹と一座を見廻し、 靈刀を
片邊にキツと身構へ、 エイツ、 と一聲氣合をかけるると其ま、 兩
手を膝に置いたま、 黙つて身動きもしません △「ドーしたので

ござらう。△「されば、エイツとだけでは相分りませぬな。○「こ
 れは間違つたではござらんか。△「さやうかも知れませぬぞ。其
 聲を聞き流して、百合之助は霊刀の目釘を濡し、再びエイツと
 聲をかけるど、霊刀がスル／＼と走り出て八方十方に分れ、居合
 す人数の數となつて何れも白刃が、ヤツと叫びながら真向に斬
 つてかゝる、驚いたのは一座である、一本の刀がコト數多くな
 つて各自の目先でヤツと斬りかゝらうとは夢にも思ひませぬ、
 けれど何れも一騎當千の猛者である、エイツといふエの字を聞
 いて皆身構えたが誰一人刀を持つてゐるものがない、サア慌て
 たの慌てないの△「貴殿は拙者の太刀を御存じござらぬか。△「
 貴殿は拙者の脇差を御存じあるまいの。○「貴殿でござらう、拙
 者の両刀をお隠しなされたは。△「いかく云ふ貴殿が拙者の……、
 △「いや拙者のを貴殿が。△「いや貴殿が拙者の」ウロ／＼する
 間にまたもやヤツ……白刃がキラリと閃いて頭上から今にも斬

り付けさうである、一座は狼狽してツイ／＼騒ぎ立てる、内府
 公も容易ならぬことに思召し、上段からキョロ／＼して在すを
 百合之助早くも見て取り百合エイツと聲をかけるど白刃がま
 た元の一本になつてスル／＼と百合之助の座右に戻る、ソレで
 一座は安心した相變らず腰の物が見えませぬ。△「武士の魂を
 盗むとは不届千万、其分では……。△「貴殿こそ拙者の物を、勝
 負いたさうと云つて見たところ誰も大小を持つてゐないか
 ら喧嘩になりませぬ。百合其大小は是れに「いふかと思ふと座敷
 の中央に大小取雑せて山の如く積み重ねてある。△「や、ツ、コ
 レは△「ヤツ、コレはドーちや」中には氣早の者も居ると見え
 て甲拙者の一刀は備前長船でござる。乙「あいや、拙者の腰の
 物は左正常でござる。丙「イヤ村正。丁「イヤ正宗、手々に銘を云
 つて撰り分けやうとする。丙「内府公心の中で内府油断を見済して
 武士の魂ともいふべき両刀を取り集めたは好いが、コレを一々

渡すは大變であらう、間違えが起らねば好いが』と見て在すと
百合、各々方、御安心下され、只今御手許へ……カチツと鐙が
鳴たと思ふと、山の如く積んであつた大小が一本も見えなく
なつた。△「オヤ、と呆れて見て居ると何時の間にか各自の
腰や右手にチャーンと大小が戻つて居ります。×「ヤツコレは」
一同顔を見合せて驚いて居る。百合、戰場に於て敵の大小を奪ひ取
ること何の造作もござりませぬ。内府公眼をパチクリさせ、内府
ならば幾千の敵兵あるとも、人なき野を行くが如しちやの百合、
御意にござります。内府すりや、其方一人が戰場に出づるは、味
方の軍兵数千を引き具れ行くの道理、さすれば其方は数千の軍
兵が總大将も同然、其方にはコレを取らせる。小姓に命じて奥
から緋緘の鎧を持ち出させ、鍬形の兜を添えて百合之助に賜は
り、内府子の爲め、忠義を盡し呉れよ。百合、コは過分なる御賜物、
有り難く頂戴……」忝なく押し戴いて引き退るを金剛坊が羨ま

し、さうに見守り、金剛はてさて、百合之助殿は好いものを頂戴さ
れた、ちやが内府公も粹の利いた君公ではある、まさか百合之
助を百合女と思はせられたワケでもあるまいが、緋緘とは其人
を得た賜物ちや、あの緋緘で靈刀を佩き、金通の術でも行ふて
敵陣に斬り入らば如何やうに花々しいことであらう、あア好い
物を賜はつた、百合殿は好いものを戴かれた。果して後に至り
百合之助は此緋緘を着て靈刀を打ち振り、花々しい功名をいた
すことに相成るのでございます、コレにて五通五勇士の御前試
合が済み、五人は芽出度く秀頼公のお召抱えと相成り、關東軍
の押し寄せ来るを今や遅しと待ち受けて居ります。さて慶長は
十九年十一月十一日、いよ、大阪冬の陣に相成る、徳川大御
所、家康公に於ては既に駿府から京都二條城に滞在して居られま
したが、鋭兵五百騎を卒れて二條城から大阪へ到着、續いて十
五日には徳川二代將軍秀忠、江戸より引き卒れた二十万騎の軍

兵を卒れて其ま、大阪へ着、其他の人数合せて四十万騎、これ
が大坂城のグルリを取り巻くこと、相成る、序ながら其部署を
申上げ、先づ家康公は最初住吉に陣を構えて居たが、其後茶臼
山を本陣と構え、秀忠は平野に陣屋を置き、佐竹上杉堀尾
京極本多等の三十餘將は東の方青屋口、今福の兩所に陣を構
ふ、松平定綱は大番騎士を卒いて其側に附き添ひ、前田利光は
岡山、結城忠直は其後詰となり、藤堂、井伊の兩將は大和の軍
勢及び生駒一正をつれて其西に構え、淺野、松平、蜂須賀、鍋
島寺澤の諸將は今宮の海濱に陣し、伊達正宗は今宮の道路に
金森小出の二將は其東に、松平利降、同忠繼、森忠政、有馬豊
氏、戸川達安の諸將は中島神崎に陣を構え、九鬼向井の諸將は
傳法院に軍船を押し列べたので大阪城は全く包圍された勸定で
ござります、コーなつては大阪城では四方八面に敵を受けたの
で形勢は全くの受け身である、同じ十一月の二十六日、志貴野

今福に於て東西兩軍の衝突があつた、大阪方の守將は矢野正倫
奮戦をいたしたのでございませが武運拙かつたものか戦死を遂
げ、續いて關東軍は葦島博勞淵へ攻め寄せ、此博勞淵は薄田
隼人正兼相が守つて居ります、敵將は石川忠總、忠總ソレ、勝に
乗じて葦島も打つて取れ、軍卒心得たり、とばかり千二百騎、
轡を列べて一時にドツと押し寄せる、薄田の軍勢は僅かに六百
恰ど敵の半分でございませ、けれど名にしあふ薄田隼人薄田關
東軍の腰抜けどもに此島を取られて溜るか、ソレ、者共者共、オ
」と答えてコレまた獅子奮迅、一合二合と合せては放れ、放
れては合せ、物の二タ時も戦ふ内に或は突かれ、或は斬られ、
双方同じほどの數が戦死を遂げた、ところが、此同じほどの數
といふのが大層味方に取つては損である、何故損であるかと申
しますと、敵は千二百、味方は六百、其中で同數に討死するこ
とに相成るとドドのお終には敵勢が六百人で味方がタツタ一人

も居ないことになる、結局味方の負でございませぬ、ドーしても一人に六人の割に討死せぬと勝てませぬ、一人に二人では恰と五分々々である、ソレが一一人に一人相對に戦死を遂げたから溜りませぬ、敵勢は八百に減じ味方は二百人と相成つた、三合四合と戦ふ内にまたもや百八十人ばかり戦死を遂げ、味方は僅かに二十人、敵の軍兵はと見るとコンドは大奮闘の甲斐があつたと見えて五百人を失ふて三百人位に減じて居る、最初からでは敵が九百人、味方が五百八十人、ざつと一人に二人を相手に斬り死した勘定でございませぬ、けれど元が少くないので一方は二十人、一方はまた三百人といふ人数である、薄田隼人正兼相がいかに豪傑でも二十人を以て三百人に當るのは鳥渡無理でございませぬ、其處へ敵勢は七百人の新手が加はつたので千人に二十人、ソノ二十人も戦ひ疲れてヘトヘトに相成つて居る、薄田もモヘトヘトでございませぬ、薄田假令新手が加はるとて、や

はか此島を渡すべきや」お得意の兩刀を使つてチャリン／＼と斬り結んでゐる、右手の一刀で十七人、左の一刀で十三人、敵の首がコロリ／＼と轉び落ちる、ソレまでに既に五六十の首は落して居りますから一刀で三四十の首骨を斬つて居る、いくら銘刀でもコレ位の斬ると齒がこぼれて鋸のやうに相成ります、薄田隼人鋸を兩手に持つて薄田一人二人は面倒だ、百でも二百でも束になつて參れ」チャリン／＼斬り結びながらスバリ／＼首を飛ばすつもりであるが一向首が飛びませぬ、薄田はてな、變なことがあればあるものぢや、コン度は一つ思ひ切り斬つて見やう」ヤツ、力に任せて斬り付けるとスバリといふ斬れ味の音はせずにはシヤツといふ、首が飛ばすに骨が鳥骨の叩きのやうに碎けて首がゲダリとぶら下つて倒れる、變だと思つて刀を見ると刃が前申し上げたやうに鋸切の齒と相成つてゐる、薄田ナルほど、これでは首は斬れん、然らば」といふのでヤツと云ひさ

拙者は頭へ二十三瘤が出てござるぞ。×二十三は愚かなこと、拙者は百二十八出てござる。甲ソレはまだ軽い方でござる、三上氏は頭の皿へ穴を穿けて往生、多木氏は鼻柱を打たれてコレまたお陀佛、平助氏は翠丸を打たれて眼を廻してござるぞ。乙拙者は御覽の如く眼の上へ瘤が出来てモ一眼が見えぬでござる。三々々の躰である、ところへ、ゴ一と地鳴がして葦島の方から山の如き大浪が寄せて来たから敵の軍兵は一度に逃げ足となつた。△ソレ海瀧でござる。×處で何方へ北げたものでござらう、此暗さでは頓と方角が立ち申さん。○何方でも手當り次第に逃げるが勝てござる、愚圖々々すると海瀧は愚か、電の餌食に成り申すぞ。△いかに左様、斯やうに相成つては助かつたものが勝てござる、拙者は此方へ北げるでござる。○お待ち下され、拙者は瘤の爲めに眼が見え申さぬ、お手引きを願ひ上げ、コンナ場合に手引をして呉れるものは居りませんから、

忽ち蛙のやうに踏み潰されて了ふ、さて逃げるものも我れ先ど争ひますから到る處で引ッ掻き合ひが初まる、殿り合ひが初まる、其殿り合ひも手に白刃を持つたま、の殿り合ひであるから斬り合ひでございます、コレで四五十人は相果てる、無難に逃げ出すものは咫尺も分らぬ暗がりの爲めに漫々と水の濺えた淵の中へ逃げ込むので申合せたやうに土左衛門になつて了ふ、コノ人数が凡そ四百五十人、方角を間違え葦島の方へ北げたものは待ち構えた薄田隼人の刃にかつてコレまた二百五十人、踏み潰された者が百五十人に電で命を落したものが八十四人、コレで大畧千人が片附いた、残つたのは大將の石川忠總と残兵十七八人でございます、茶臼山の本陣へ急使を立てん、小森三左、急上は是非もない、茶臼山の本陣へ急使を立てん、小森三左、急いで參れ三左「心得候」小森三左が手探りで本陣へ急報に行かうとするど眼の前へヌツと現はれたのが不破彦六郎重治、彦六郎

の姿が見えると同時に、電はカラリと晴れて海瀟の音も止み、今までは打つて變つた晴天でございませう忠總は怪しや、今まで斯ばかり荒れたるを……」不審さうに空を見上げる處へ、本陣へ使はした筈の小森三左の生首を提げて、ヌツと現はれたのが不破彦六郎である忠總や、つ、汝は敵か彦六敵も敵大敵ちやわい、やい石川忠總、汝身のほども知らず好くも薄田氏の持ち場へ踏ん込んだな、ドーセ二東三文の命ではあらうが猪古才にも程こそあれ、衆寡適せず一時は汝に花を持たせたが、それは江戸くんだりから遠方を能く御苦勞に思つたからのお情ぢやコン度の戦が本當の勝負、何と骨身に應えたか、此上は汝が相手だ、午勞斬り竹の子斬り、唐竹割りに石臼割り、ソソな割り方があらうとあるまいと、それは何うでも好いとして肝腎要は汝の素ッ首、兩耳揃えて其處へ突き出せいとぞ呼ば、つた、石川忠總は栗毛の三才駒に跨がり、大身の槍を提げてキツと彦

六郎を睨んで居りましたが、あまりの不敵にガタ／＼顛ひ出した忠總「す、す、すりや、な、な、汝は……彦六」なんだと、す、すりやとは何たる口上ぢや、名乗りが聞きたくば聞かせて呉れる、吾こそは内府公の直參にて、不破の彦六郎重治なるわ弱年なれども百万や二百万の大敵は唯一ト掴みに掴み殺さうといふ豪傑だ、藪蕪の化物のやうにガタ／＼顛えて居すと、念佛でも唱えて死ぬる仕度でも仕つれ」云ふより早く一刀振り寄すすでに馬の胴腹から斬らんとするを、大將を討たせじと駈け寄つたのが二名の軍兵、彦六郎の左右から斬つてかゝるを猪古才なとばかり身を轉して、一人を肩から斜に斬つて二つに割り、一人を下腹の邊から横に切つてコレまた美事に二つに切り放し彦六「ドンなものぢやと顔を擡げるとコレはしたり、忠總は馬の尻にありたけの力をこめて、ビュー／＼絶え間もなく鞭を當てながら雲を霞と逃げて居ります、見る間に豆のやうになつたが

ソレでもまだ懸命に逃げて居る、彦六郎カラ〜と笑ひ、彦六郎は更にも大に疲れて居るので、一旦城内へ息を入れに引き取り、薄田に走ること、相成る。彦六郎は更に外の持ち場へ應援

第十席

一方茶臼山の本陣に於ては徳川家康が虎の皮の敷物に乗り、形勢如何にと待ち構えて居ります、そこへ注進が駆け付け、御注進々々家康「オ、何事なるぞ、只今蜂須賀至鎮殿、敵の大將明石全延を打ち破られてござります、家康何、蜂須賀が明石の軍勢を打ち破つたと申すか、御意の通り家康すりや、穢多堀が落ちたと申すぢやな、△いかに穢多堀が、味方の手に入

つてござります、其の事御注進注進は其ま、走つて行く家康へまたもや、△御注進〜家康「フム何事なるぞ、石川忠殿、草島博勞淵をお取りになつてござります、家康何、何といふ忠總が草島を取つたと申すか、△いかにも左様にござります、家康馬、馬鹿なこと申せ、忠總は千人の軍勢を一人残さず討死にさせ、三々の跡にて北へ戻つたタワケ者なるわ、△イヤイヤ、そのは先刻のこと、蜂須賀殿の軍勢五百人を借り受け、討死の覺悟にて再度打ち向はれたでござります、家康何、蜂須賀の軍勢を借り受け、不破彦六郎が助勢いたす上は、草島の落ちる筈はないわ、△どころが其の不破彦六郎、早や何れへか助勢に参り、家康何、不破彦六郎は草島より去つたと申すか、△いかに、

幸村、御大将、大御所様、軍兵は四十万人より一ト粒撰りの猛者ばかり、三千人取り揃えてござります、家康「出かした彦左、續けッ彦左、心得候」關東軍總大将の家康を大将とし、大久保彦左衛門を副將とした一ト粒撰りの三千人、勝に乘じて茶臼山の本陣を出て天王寺から生野へ廻り、真田の出丸へ押し進む其勢ひ、例へんに物もない威勢でござります、ところが生野に於て行く手に大阪勢の一隊が現はれた、家康は連戦毛の駒に跨り金色の采配を持つて鞍壺に突ツ立ち上り家康彦左、アレを見よ敵兵ならん」彦左衛門は栗毛の駒に跨がつて居ります、同じく馬上より打ち眺め彦左「いかにも大阪方の軍勢にござります、家康それにしては些と花々しいぞ、遠目には櫻花爛熳と咲き亂れたやうに見ゆるわ彦左「いかさま見事にござります、まさか花の中に居るでもござりますまいが家康「やア、分つたぞ彦左、櫻花と見たは緋緞の鎧ひちや彦左「いかにも緋緞の鎧にござります、それに

いたしましても人数が五十人、何れも鍬形の兜を冠り、黄金作りの太刀を佩き、色白く眉秀で、鼻筋通つて口元バツチリ……家康「モ一好い、その顔立ちにはモ一澤山ちや、兎に角美男であるの彦左「左近中将業平朝臣ソコのけの美男子にござります、家康「木村長門守ではないか彦左「イエ、長門守とは些と年齢が相違いたして居ります、長門守は凛々しい男顔でござりますが、此緋緞は女にしても見まほしい優男にござります、家康「ソレにしては優男を好くも揃えたものぢやの彦左「五十人が何れも同じ人間らしうござります、家康「同じ人間が五十人も居る筈はないが、似た者を狩り集めて同じ緋緞を着せたのであらう彦左「いえ、ソレではござりません、其証には一人が太刀を持ちますと五人が残らず太刀を持ち、一人が此方を向きますと五十人が皆此方を向くでござります、家康「氣味の悪いことを申す、五十人が皆素から訓練したものであらう、昔武藏坊辨慶は、藁で影武者を作

つたといふ、まさか薬人形ではあるまいの彦左、薬人形が斯やうに美しうございましてはソレこそ化物でございませう、家康「何は兎にあれ、其方に五百人の軍兵を貸し與える間、一應正体を見届けて參れ、彦左「畏り奉る」彦左衛門五百人の精兵を引き卒れ、家康を後に殘して緋緋の側へ進んで參る彦左「ヤア、其處なる緋緋は薬人形か、唐人形か、得も眞の人間ではあるまい、斯くいふ吾こそは關東に其人ありと聞えた大久保彦左衛門忠教なり、緋緋の兜を脱いで降參すればよし、さもないに於ては五十人を一ト束として麻繩にて引ッ括め、關東への土産物にいたすから左様心得い」と呼ば、つた、緋緋の鎧に堅めた美男の武士、五十人が一同に口を開けて美男吾こそは内府様直參の大將、佐々木百合之助美政なり、大久保彦左衛門では相手にならぬ、關東の古狸徳川家康を是れへと申せ、千枚張の面の皮を剥いで太鼓に張り皮の張り裂けるほど叩いて呉れる、まつた肉は狸汁として

味方の軍勢に舌鼓を打たせん、出直して家康を引きすり參れ」とぞ呼ば、彦左衛門呆れて了つた彦左はてさて、人間は見かけに寄らんとは好く云つたもの、彼の可愛らしい口から今の高言がよくも出たものぢや、何處を押せば左様な音が出るのぢや、難人形の腹を押せばビーンと鳴り、下司野郎の腹を押せばお屁が出る、と相場の決つたものぢや、然るに緋緋の鎧が狸ぢやの家康ぢやの、勿体なくも吾が君家康公は、清和源氏の末流にあらせられて元の征夷大將軍、今は正二位右大臣淳和、并學兩院、別當源氏の長者徳川の家康公なるぞ、其御方を捉え古狸とは吐したりな、いで彦左衛門が其口を八ッ裂にいたし呉れん、物共進めッ精兵「ハッ」一齊に攻めかゝるを緋緋の五十人、サツと一列に垣を造つてスラリと一刀抜き放ち、精兵五百人の中へ飛んで入る、とところが精兵どもでございませう、これに應戦せんとはいたしますが五百人が五百人とも皆腰の物がございませう、△

や、ッ、拙者は儘かに腰へ帯して参つたが、
刻まで一刀は握つて居りましたや、
貴殿も、△ソレでは何れも無腰でござるな、コレでは戦はなり
申さん、ソレ、かく申す内に緋絨が斬り込んで参つた、此上
は相撲の手で組み伏せるといたさうか、
るべく刃先を避けて後ろから抱き付くといたさう、ソレ、ソ
コまで参つたぞ、○拙者が組み付くでござる、一人が緋絨の後
方から、○ウン、と組み付き、○各々、今の内に刃を奪り上げ
召され、すると一人が、
者に抱き付いてドーする御所存ぢや、
か、儘かに緋絨の……、△分つてござる、御覧なされ、ソレ、ソ
レ、其處に居り申すぞ、其緋絨は人間ではござらぬ、虹のやう
な影でござる、いやさ、虹でござる、其証據には緋絨が居ると見
えて何にも居りませぬ、緋絨の色が小坂氏の顔にも映つて居り

ますぞ、
居るやうにござるが、障つて見れば形はござらぬ、コレなら素
手でも怖れるには足り申さん、ソレまた参つた、コレは平氣
で居つても大丈夫でござる、斬られる心配はござらぬ、唯眼の
威しでござる、○いかにも左様……、いふ間に同じ緋絨が来て白
刃がキラリと閃いたと思ふと、三人ばかり同時に首がコロリと
落ちた、△ヤッ、首が落ちてござるぞ、
しうござる、ヤアまた殺られた、ワ、
キユーッ、油断をして居るから忽ち二三十人首を落されて了つ
た、油断をせぬ者も四方八方から同じ緋絨が来るから北げ場を
失ひ、無腰の者同士がワイ、立ち騒ぐばかりである、折柄組
み付いて息の音を止めたと思ふと、緋絨でなくて味方の者であ
つたり、コレ度こそ本物であらうと組み付くとスバリと首を落
される、まるで手の付けやうがございませぬ、大久保彦左衛門

馬上より此跡を見て彦左「奇怪至極な敵の舉動、こは得も人間ではあるまい、人間でなくば妖怪變化か、南無弓矢八幡大菩薩、變化の正体現はさせ給え、東を向いて祈りを上げると五十人の緋緘がパツと消えて片邊の藪蔭から鐵砲が一度にボン／＼、打ちを喰つて彦左「ソレ伏兵、ハイヨー、ハイヨー」唯一騎命からたのではございませぬ、五十人の蔭武者で散々敵兵を弱らせて置き、モ一好からうと思ふ處でパツと消えるを合圖に藪蔭から彦左衛門が逃げ出すと藪の中から現はれたのが眞田大助「大助」佐々氏「御手柄でござつた百合彦左衛門では飽き足りませぬが、大助「イヤ、御覽の如く精兵五百人、慶殺しに遇はせたまはれ、相手が大久保であらうと何者であらうと、貴殿の功名は拔群で

ござる百合「お詞傷み入つてござる大助」ところで唯今城中よりの急使、天満船場の持場が危険、貴殿に早速助勢に參るやうどの御説でござつた、御疲れでもござらうが拙者御伴仕る、御同道下されまいか百合「心得ました、なれど此ま、此持場は放つて置けませぬ、拙者に存じよりもござれば暫くお待ちを、貴殿其處にて御見物下され」云ふかと思ふと遙かの彼方をキツと睨み、エイツと聲をかける、此方の彦左衛門「命から／＼十四五町も逃げ延びたところで馬がハタと止まつて了つた彦左「コレは不思議、叱ッ／＼、走らぬか、叱ッ」馬は前脚を馬「イヒ、ン彦左「イヒ、ンも糞もない、走れ」馬はクルリと向きを轉えて元來の方へ一算に走り出す、彦左衛門「慌てたの慌てないの、彦左「コレ何といたしたものでや、其方ではないわ、本陣の方へであるが馬「イヒ、ン彦左「元來の方へ走つて何とする所存ぢや、味方の軍兵は残らず討死、身共一人が敵軍の中へ飛び込ん

で何うするものぢや馬イヒ、ン」馬は高く嘶きながら百合之助の方へ一直線に馳つて行く、馬上の彦左衛門溜つたものでございませぬ、手綱を引き締めて反れるだけ反るが馬は少しも云ふことを聞かない、見すく敵の眼の前へ戻つて馬は百合之助の前でハタと止まつた、彦左衛門馬上で地団駄を踏んで居ります、ソレと見た百合之助、百合之助大久保彦左衛門、真二つに斬り捨てやる筈なれど汝如き弱虫を斬つては吾靈刀の汚れであるに、より、コレから天満へ助勢に行つて戻るまでコレして置いて呉れる、エイッ」右手でサツと空を切つたと思ふと彦左衛門は馬上のまゝで金縛りにされて了ひ、手も足も出せなくなつた、ソレを見済して百合之助は、大助と共に天満の方へ引き揚げて行く、音高く走つて参ります、カツボく、本陣の方へ蹄の音は勇ましいが勇ましくないのでは馬上の彦左衛門、鞍の上に跨つては

居るが両手は金縛りにされて居る彦左、何といふことをいたす奴であらう、コレでは戦も何も出来たものではない、あア世には酷い奴があつたものぢや、両手を練られたまゝ家康の方へ走つて行く、蹄の音、カツボく、

第十一席

吉凶如何にと待ち受けた徳川家康、連戦毛の駒の上から遙かの彼方を打ち眺め家康「オ、彼處に見ゆる栗毛の馬こそ大久保彦左衛門に相違ない、ところが唯一人は不思議であるぞ、軍兵は何ういたしたのであらう」云つて居るところへ大久保彦左衛門足は重いが馬上であるから何時の間にか御前へ戻つて居る家康、彦左ではないか彦左「へい家康、何とした、大層沈んで居るが緋緘は何うあつた彦左「へい家康、へいでは分らぬ、委細を申せ彦左三

ぐでございませす家康何、三々な目に遇つたと申すか彦左御意に
ございませす家康すると、五百人の軍兵は皆討たれたと申すか、
彦左一人残らず殺られてございませす家康でもタツケた奴め彦左
何と云はれても致し方ございませせん家康して、緋緘は何者で
あつた彦左化物かど存じます家康化物ぢやツ……彦左へい家康
確乎いたせ確乎、へい、と下郎でも申すやうな返事をいたす
その手は何とした彦左申し譯がございませせん家康何としたと申
すに彦左丁寧にも拙者を呼び戻し、金縛りにいたしてございま
す家康何、金縛りにしたといふか彦左彦左衛門生れて初めて金
縛りといふものにされてございませすが随分應えます家康馬鹿者
ツ、彦左様のことで戦争がなると思ふか彦左さうは仰しやいます
が、彦左の代りに御所様がお越しになりましたところ、拙者同
様、金縛りにお遇ひ遊ばすに決つて居ります、云は、御所様の
身代りに金縛りに遇はされたのでございませすから、彦左は忠義

の繩目に遇ふたつもりで居ります家康馬、馬鹿者めツ……彦左
へい家康あア、情ない奴ではある、して緋緘は何とした彦左天
満の方へ引き揚げました家康天満へ……ではモ一彼處には居ら
んと申すのちやの彦左左様にございませす家康では此隙に乗じて
出丸へ討つて参らう、伴せいで彦左仰せではございませすが、かや
うの手付ではお伴はなり兼ねます家康あア困つた奴ぢや、此處
へ出ませい家康公手づから解いてやらうとなさるが容易に解
けませせん家康仕方がない辛抱いたせ小柄で指を一本スバリと
斬り落し家康さア解けた彦左解けたのではないお斬りになつた
の下、あア痛い、家康我慢いたせ、五百人を失ふた所罰とし
ては指一本は大層な負けぢや彦左有難い仕合せでございませす、
家康さア参る、物共つ、け一回「ハーツ」コレよりまたもや出丸
をさして参る、恰と猪飼野へ來か、つた頃、△申し上げます
と一人の軍兵が家康の前へ進み出た家康何事ぢや、△行く手の

道の上に不思議なものが落ちて居ります家康不思議なものとは何であるか △石にて作りましたる豊臣太閤殿下の像が落ちて居ります家康何、太閤の石像が落ちて居ると申すか △「ハッ」家康ソレは時に取つての吉兆ぢや、彦左衛門、拾ふて参れ彦左心得ました」彦左衛門が心得て馬より下り、軍兵を案内に行つて見ると成るほど石像が落ちて居る、彦左衛門拾ひ上げて家康の側へ戻り彦左御所様、大した拾ひ物をいたしました家康何うであつた彦左高さ一尺もあらうといふ瑪瑙の太閤像でございませす家康何、瑪瑙で作つた太閤の像だと申すか、ドレ、オー、これは拾ひ物ぢや、捨て値にしても二百兩以上、殊に太閤の像であるは勝戦といふ前兆ぢや、彦左、コノ度は大勝利であるぞ彦左太閤様の偉業をお拾ひ取りになりましたも同然、万々歳でござ……」とござりますのござまで云ひかけて彦左「ヒヤ、た、大變……」と尻餅を搦いた、尻餅を搦いたも道理である、太閤

の石像は忽ち土遁の勇士西源三郎行成と變り、家康をハツタと睨み付けたから溜りません、家康は馬から轉び落ち家康彦左、助けて呉れ……」馬から落ちるほど家康の驚いたのは御案内の如く源三郎は駿府城に於て一度見参いたして居ります、泥人形の狸となつて書院へ忍び込み、すでに一刀の下に命を取られやうとしたことがございますから、家康に於ては源三郎の味を好く知つて居る、其者が石像と早變りをしてハツタと睨むのだから、家康ならずも落馬するほど驚くに違ひございません家康彦左、た、た狸ぢや……」源三郎は腰なる一刀スラリと抜き源三、やい古狸、今こそ汝の命を貰ふた、覺悟に及べ」ヒラリ、ピカ／＼斬り付ける、スワ君の一大事、大將を討たすな、曲者討ち取れと二千五百人の精兵、一同に刃を抜き放つて源三郎目かけいふ多勢であるから見る／＼家康から引き放され、四邊を見る

と皆精兵でございます源三「チエー残念、またもや討ち損じたか
 此上は當るを幸ひ切つて切つて切りまくらん、五十人位ゐ束に
 なつて来い」チャリン、火花を散らしながら切りまくつ
 て見る間に百二十三人の首を討ち取つた、けれど二千五百人の
 中の百二十三人では後から、切りかゝるからソレこそ鋸切に
 なるまで切つたところ、一人で五百人切れることは出来ません、
 軍兵の方では新事が引きかへ取かえ切つて来る、流石の源三郎
 も疲れ果て、バツと消えてなくならうと考へ居る間に敵兵は十
 重二十重に取り圍んで、逃がさじと轟々詰めて来る、此躰を遙
 に見たのが不破彦六郎、今まで晴れて居た天氣が忽ち曇つて、
 一面の霧に塞がれたから四邊は濛々として咫尺も分からねぬ、
 如何でござる御同役、俄の霧で皆目先が見えませぬ、コレでは折角
 ×如何にも仰せの通り、一寸先が見えませぬ、コレでは折角

圍んだ曲者が何處へ行つたとも知れんでござる、やツ、何やら
 拙者の頭の上を歩いて居るでござるぞ、△「さう仰せあれば拙者
 の肩を誰やら踏んでござる、○「やアやア、何者か拙者の鼻柱を
 蹴飛ばして参つた」ワイ、云つてゐる間に源三郎は易々と圍
 みを乗り越え、此邊であつたと思ひながらヒヨイと顔を出す
 家康の鼻とコツリ鉢合せをした源三「おのれ家康、家康、ヒヤ、叶は
 ぬ」家康は仰天して彦左衛門の腰に取り付き家康彦左、彦左、
 助け呉りやれ彦左、此上は逃げるに越すことはございませぬ、さ
 ア、彦左が脊負つて差上げませう」彦左衛門家康を脊中に脊負
 ひ、霧の中をスタコラ、逃げ出した源三「おのれ逃がして好い
 ものか、待て、待て、待て」コレまた霧の中を追ふて参る、彦左
 衛門は一生懸命、家康も一生懸命である、彦左の頭ツ玉へダニ
 のやうに獅噛み付いて家康彦左、脊中からスバリとやり居るま
 いか彦左、それは鳥渡分りませぬ、得てして脊中をスバリとやる

ものでございまして家康「氣味の悪い事を申す男ぢや、彦左々々彦左へイ家康」予を前へ抱いて呉れ彦左前へ抱けと仰せで家彦スバリとやられては命がない、前の方へ抱いて呉れ彦左「それでは前へ抱ませう」大の男を前の方へ抱いて逃げるのだから用意に足がはかどりません彦左「ドーも足が纏れて叶ひません家康」予は貴公の前の者が障つて……」ソナナことはございせんが兎に角走り惜い、けれど後方から源三郎が抜刀を提げて待てー待てーと呼び、りながら走つて来るから逃げんワケには行かない、彦左「ヤツ家康」ドーした彦左「人糞を踏みました家康」我慢せい」少時すると彦左「ヤツ家康」ドーした彦左「此處は川でございせん家康」橋はないか橋は彦左「あるかないか皆目霧で見えせん家康」困つたのう、では水の中を渡れ、大川でもあるまい彦左「少々冷たうございせんが御辛抱を家康」冷たいぐらゐ愚かなことぢや彦左「ドーやら渡りましたが、やア、あのザブ」といふ音は源三

郎の渡る音と見えます、こりや大變家康「逃げい、彦左」あア息が切れさうな家康「心配いたすな、予が代りに呼吸をいたし遣はすぞ」ドン、逃げては行くが何分霧が深いので方角が頓と付きません、唯無闇と逃げて行く、物の二三里も逃げたと思ふ頃「ドーやら陣屋らしい處へ着いた彦左」御所様家康「何うした彦左」ドーやら陣屋へ戻つたやうにございせん家康「ソレは結構、ソレでは命拾ひをしたかな彦左」モ一大丈夫でございませう、お下り遊ばせ家康「ヨシ、あアやれ、エライことであつたのう彦左」大變でございました、御所様家康「何ぢや彦左」何やらがヤ、いたして居ります、茶臼山の本陣ではございせんまいか何様の御營所でございませう、若しや二代（將軍秀忠）様の御陣屋ではございせんまいか家康「秀忠の陣屋かも知れんぞ、一つ聞いて見る、秀忠の陣屋でも誰の陣屋でも好い、カク」の次第である事由を云つて休息させるやう申し付けて呉れ彦左「畏

「まりました」彦左衛門が手探りに進んで行くとい人の武士が立つて居ります、霧で何者とも判然しません彦左「コレ」其處なる武士「武士何者ぢや彦左何者とは不禮千萬、此處は誰の陣所なるぞ武士此所は陣所ではない、汝は何者ぢや彦左不禮至極な口を利く奴ぢや、何者か何者かど不禮な詞使ひをして後で後悔いたすな、苟くも此處に在すは……」云ひかけて彦左「ソレは後で名乗らう、陣所ではなくば何處かソレを云へ武士此處は眞田左衛門尉幸村様の出丸ぢや彦左ヒエー……」彦左衛門二三間後方へ引ツくりかへつた、轉倒つた拍子に家康の居る方角を取り失ふて、何處へ行つて好いか分らなくなつた、と云つて御所様と呼ぶツケに参りません、低い聲で彦左「ヨイ、ヨイ」と呼ぶ、家康公はまさか彦左がヨイと呼ぼうとは思ひません、待つても戻つて來るので家康彦左、彦左彦左衛門」彦左衛門は敵に其聲を聞かれてはならんと思ふから、聲する方へ伺

ひ寄つて彦左「叱ッ、大變でございます家康「オー、彦左衛門か」彦左「叱ッ家康「家康待ち兼ねたぞよ彦左「叱ッ」御所様家康何ぢや彦左「此處は陣所ではございません家康「誰の持場でも好い、家康ぢやと申せば……彦左「叱ッ」此處は眞田の出丸でございます家康「ヒエー……」コレまた二三間後方へ轉倒つた出丸に於ては早くも其聲を聞きつけ、○「ド」やら彦左衛門といふ聲がいたす、家康ぢやと申せといふ聲もいたした、△「若しかいたすと家康彦左衛門の兩人が迷ひ込んだのかも知れません、△「まさか右様のこともござるまいが、何は兎に角怪しい者に相違ござらん、各々、引ツ捕えて功名なされ一回合點でござる」十五六人の番の者が霧の中を手探りに進んで來る、其聲を聞いた家康と彦左衛門、双方とも気が気でございません家康彦左「ヨ」彦左「御所柿ヨイ」低い聲で探り合ふ、△「各々方、今彦左「ヨ」と申しましたぞ、△「いかにも、御所柿ヨ」とも申しした、

此邊に相違ござらん」聲が段々近づいて来る、家康はモ一溜り
ません、尻を引ッからげて逃げ仕度をしてゐると彦一御所様か
家康「オー彦左か」またもや前の方へダニの如くブラ下り家康彦
左急げ」彦左衛門一生懸命である、スタコラ」逃げ出し
てやがて来たのが一本の榎の木、彦左鳥渡息を繼がせて、戴き
ます、逆も息が切れて歩めません家康大丈夫であるか彦左此木
の蔭に休めば大丈夫だと存じます、其間には霧も晴れませう」
家康ソ一か、それでは一ト休みいたさう」膝を下すや否やに、
霧がパツと晴れて了ふ、不破彦六郎の水遁の術で降らした霧
だから自由自在でございます彦左「ドーやら晴れましたございま
す、此間に逃げるといたしませう」と家康を前へ抱いたま、命
からと茶臼山の本陣へ逃げて参り、味方の人敷を調べて見ま
すと生き残つたものが僅かに二十三人よりなかつたと申します
一方金剛坊は到る處に於て木遁の術を應用して關東軍を惱まし

高橋剛右衛門道照は塙團右衛門と共に蜂須賀至鎮の營へ夜討ち
に参り、營所へ火をかけてコレまた三々な目に遇はせ、遂に家
康から和議を唱えること、相成つて芽出度く冬の陣を終り、五
名共内府公の御前に呼び出され内府此度のこと皆其方ら五名の
働きに依ることである、秀頼過分に思ふ」どの御説に五通五勇、
士は大に面目を施し、恩賞には何れも黄金千枚宛を賜はり、後
李桃源の西源三郎行成は朝鮮江景に於て廢家を再興し、七十二
才にて世を終りましたが其子孫は今も朝鮮にあると申します、
高橋剛右衛門道照は山寨に立て籠つた因縁から信州と遠州の國
堺に一家を構え、百姓として世を終りましたが享年が五十七才
信州平岡の高橋といふ材木屋が其子孫なさうにございます、ま
た不破彦六郎重治は佐々百合之助美政と姉弟の義を結び、越中
富山の城下に薬屋を初め、重治は四十才、美政は四十七才で世
を終り、養子を貰つて家を相續させたさうにございます、何

といふ家であるかは判然いたしません、怪僧の金剛坊は曾て大日岳の山中に於て助けた善吉といふものと京都に於て廻り合ひ善吉は京都で盛んに呉服屋を営んで居りましたので報恩として善吉は京都の大原に寺を建て、ソレに金剛坊を住はせましたがコレまた九十三才の高齢を保つて涅槃に入り、寺は金剛寺として今は慶寺になりましたが其跡が現今でも残つて居ると申しま

告廣版新館文隆

渡邊默禪君作
三品馨園君作
同君作
和田天華君作
島川七石君作
山田松琴君作

雪降る深山
偵探 青年士官
戀の執念
憐れ誰が兒ぞ
胸の火
ゆめのあと

上記の小説
は頗る面白
き好評の物
に御座候

五道の勇士大活動 (了)

大正六年十月五日印刷
大正六年十月十日發行

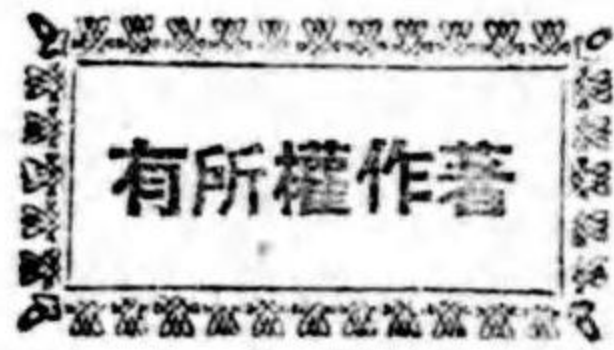
(定價金四十五錢)

樋口隆文館 營業案内

貸本營業の方又は取次

販賣營業の方で樋口隆文館より御取引を開始やうと思はる方は郵券三錢御送り下されば、早速に御直目錄を御送りいたします。
樋口隆文館は日本に於ける唯一の貸本向小説専門の御問屋でありますから、貸本向の小説なれば東京版でも大阪版でも一切取り揃へて御安くいたします。

樋口隆文館は自家出版物のみならず、現に七百種程所有して居る者です。安んじて御懇念なく御取引を願ひます。樋口隆文館は毎月新報月報を御得意様へ無料で御知らせ致します。樋口隆文館は毎月必ず新報月報を發行いたします。其作者は現代に於ける知名の小説家で加之に内容が面白く、奇麗で其の製本の形式までがすべて貸本向に出来て居ります。樋口隆文館の營業場所は大阪市南區三休橋、谷南へ入西側、振替番號は大坂八七九七



【動活大士勇の通五】

發賣元

大阪市南區三休橋 谷南へ入西側

樋口隆文館

(電話) 南六七九九番
(振替) 口座大坂八七九七番

講演者 浮世亭夢丸

發行者 樋口源次郎

印刷者 荒木佐兵衛

大阪市南區阿波座中通 二丁目四番地

大正六年四月改正 樋口隆文館藏版目錄

發賣元

大阪南區三休橋筋谷南入西側

樋口隆文館

振替口座大阪七八九七番・電話南六九七九番・電報略七手

樋口隆文館より出版して居る小説は、いづれも、現代に於ける知名作家の苦心作でして、全國の新聞紙上で多大の好評を以て迎へられた佳作揃です。全国的新聞紙上で多大の好評が有つて、至極面白い小説ばかりです。加之に東西の各大家が熱心に執筆せられた、精緻艶麗なる美術的の口繪が各冊に挿入してありますから頗る奇麗で心地好うございませす。口繪を描寫せられし畫伯は左記の諸氏で、(アイウエオ順)伊藤靜雨、井川洗屋、歌川國松、歌川珣舟、梶出半古、鍋木清方、川上恒茂、須藤宗方、鈴木錦泉、谷 洗馬、名取春仙、長谷川小信、水野年方、前野春亭、八幡白帆、山本英春、渡邊悟光、

また弊館より出版して居る講談小説は各敏腕の速記者により速記せられたものですから、すべてが何人にも読み易く出来て居ります。其速記者は左記の諸氏です

丸山平次郎、山田都一郎、吉田松茵、山田唯夫、加藤由太郎、浪上義三郎、石原明倫、宮原流水、馬場三郎、

また此目錄の外にも續々と引續き新版發行の準備中がございますがそれは追々と發表することいたします。

花鳥叢書		この花鳥叢書は、他にある同形の文庫のそのやうに、千種一律異趣のものとは異つて、武勇あり、落語あり、探偵あり、忍術あり、非小説あり、愛小説あり、千種千様に變つた妙趣合著して居ます。故に、男にも向けば、女にも好かれ、大人にも讀まれ、少年にも適した携帶にも至便な讀物でございます。	
一 探偵小説	血染の手巾	七 無明	荒象園鬼門
二 小説	戀しき仇	八 少年	槍の小太郎
三 探偵小説	幽靈船	九 四給	御前大試合
四 落語	金馬集	十 名偵	佐分利左内
五 幻術	仙冠者義虎	十一	日本武術流祖録
六 使天	木鼠小法師	十二	磯畑伴造天下巡遊記

十三	元田文五郎旅日記	三十五	小察	すめる心
十四	退管	三十四	前川	忍術大試合
十五	退管	三十三	怪	幽霊の出る池
十六	三傑	三十二	名	大阪百人斬
十七	三傑	三十一	女	井筒女之助
十八	三傑	三十	小	妻の罪
十九	後藤	二十九	名	武田三勇士
二十	小怪	二十八	上	妖怪退治
二十一	無敵	二十七	小	房江と小百合子
二十二	名	二十六	小	武士系
二十三	鎮	二十五	小	片破れ月
二十四	鎮	二十四	小	因果經

×三怪人終編	×三怪人續編	×三怪人後編	×三怪人	大正五人女續編	大正五人女續編	大正五人女續編	大正五人女	金色洞終編	金色洞後編	金色洞	毒血の壺終編	毒血の壺後編	毒血の壺	▼江見水修著
×探偵の娘	泣かぬ女	泣かぬ女後編	泣かぬ女終編	蠻勇の人	蠻勇の人後編	瑠璃子	蠻勇美人	×純子	×純子後編	女馬賊	女馬賊後編	▼山岸荷葉著	五人娘	
▼三木天遊著	名妓小きみ	名妓小きみ後編	▼伊原青々園著	×迷ひ子	×迷ひ子後編	×迷ひ子續編	×迷ひ子終編	▼渡邊默禪著	×怪の怪後編	×雪降る深山	×雪降る深山後編	×雪降る深山終編	×美人魔	
×女獅子	×續々女獅子	×七首藝妓	×七首藝妓後編	×櫻井一策	×櫻井一策後編	×風流菩薩	×風流菩薩後編	×天狗武士	×天狗武士後編	×俠妓小鶴	×俠妓小鶴後編	×千里眼	×千里眼後編	×千里眼續編

×横山花子	×横山花子後編	÷紅蓮の炎	÷紅蓮の炎後編	×春の風	×春の風後編	×鬼梶原	×鬼梶原後編	×鬼梶原續編	×雷鳴六郎	×雷鳴六郎後編	×磯の松風	×磯の松風後編	×千枝子	×千枝子後編	×千枝子終編
×封人窟	×封人窟後編	×封人窟終編	▼小林躰月著	÷灯(ともしび)	÷灯後編	÷夜半の鐘	÷夜半の鐘後編	▼米光關月著	÷女相場師	÷女相場師後編	▼清風草堂主人著	▼佛蘭西探偵譚	▼徳山秋聲著	愁芙蓉	×若き人
▼黒岩涙香著	÷眞暗	÷指環	美人の獄	×大盗賊	▼齋藤弔花著	沖の荒浪	沖の荒浪後編	▼篠原嶺葉著	田鶴子	田鶴子後編	田百合合	田百合合後編	▼瑠璃生著	÷かくし兒	÷かくし兒後編
▼河原紅雨著	×月に叢雲	×月に叢雲後編	□母の秘密	□母の秘密後編	▼和田天華著	×靜子	×靜子後編	×靜子終編	女のまこゝろ	女のまこゝろ後編	畫家の妻	畫家の妻後編	かくし妻	かくし妻後編	花咲く春

涙の雨後編	井手蕉雨著	お雪幸七後編	佐野天聲著
戀	許嫁	お雪幸七終編	紫帽子
つきの縁	許嫁後編	菩薩小僧	伊藤銀月著
つきの縁終編	許嫁終編	菩薩小僧續編	予
呪ひ火	橋本埋木庵著	菩薩小僧終編	出潮
呪ひ火後編	毒百合	繼しき母	怒濤後編
呪ひ火終編	毒百合終編	繼しき母後編	白柳秀湖著
戀のしからみ	浮寝鳥	櫻貝	黄昏(たそがれ)
戀のしからみ後編	浮寝鳥後編	櫻貝後編	行友李風著
戀のしからみ終編	片破れ月	櫻貝後編	龜甲組
蘭子と信吉	姉と弟	血染の吹雪	龜甲組後編
蘭子と信吉後編	姉と弟後編	血染の吹雪後編	龜甲組終編
蘭子と信吉終編	憐なる母と娘	血染の吹雪終編	因果經
蘭の花	憐なる母と娘後編	齋藤溪舟著	人の怨
蘭の花後編	お雪幸七	八まん橋	人の怨後編

人の怨終編	安岡夢郷著	中村兵衛著	春秋園著
戀の罪	地獄谷	小説血染の手巾	俠妓胡蝶
戀の罪後編	地獄谷後編	二人の影	俠妓胡蝶後編
安宅丸	薄命怨	義侠の青年	齋藤星瀾著
安宅丸後編	薄命怨後編	小月の輪	將基嶋
安宅丸終編	罪の子	女水月尼	將基嶋後編
大澤天仙著	罪の子後編	妻の罪	縁むすび
催眠術	洞窟の怪美人	狸心中	二人の花髻
春風樓主人著	洞窟の怪美人後編	父なき子	二人の花髻後編
藤浪	紫組	父なき子後編	俠美人
藤浪後編	紫組後編	甚九郎稻荷	須藤南翠著
藤浪終編	肖像畫	甚九郎稻荷後編	榎木淵
隣合せ	肖像畫後編	甚九郎稻荷終編	浮木船
隣合せ後編	肖像畫終編	芳尾生著	浮木船後編
隣合せ終編	螢光著	怪談皿屋敷	關のうつ、
	憐れなる女と女	怪談後の皿屋敷	關のうつ、後編

△鹿嶋櫻巷著	×恨の燭後編	□愛と財終編	□知らぬ親
□戀の敗者	□雨後の月	□戀と金と命	□知らぬ親後編
□戀の敗者後編	□雨後の月後編	□戀と金と命後編	×残り草
□梨園情話	□須磨子と千代子	□富の力	×残り草後編
□梨園情話後編	□須磨子と千代子後編	□富の力後編	×残り草終編
□刺ある花	□舞ひ風	□富の力終編	□腹ちがひ
□刺ある花後編	□舞ひ風後編	▼青峯著	□腹ちがひ後編
□女香具師	□舞ひ風終編	×女小説家	□腹ちがひ終編
□女香具師後編	□怪の女	▼運塚麗水著	□ゆめのあと
□海の豪傑	□怪の女後編	÷黒髪	□ゆめのあと後編
□海の豪傑後編	▼新田静濤著	□白菊御殿	÷ゆめのあと終編
□海の豪傑終編	□戀の淵瀨	□銀杏小路	□人こゝろ
×女賊三人	□戀の淵瀨後編	▼山田松琴著	□人こゝろ後編
×女賊三人後編	□戀の淵瀨終編	×操くらべ	□人こゝろ終編
▼遠藤柳雨著	□愛と財	×操くらべ後編	□うすき縁
×恨の燭	□愛と財後編		□うすき縁後編

□浪の音	▼三嶋霜川著	□可憐の棄兒後編	樋口隆文館 藏版定價表 小賣直 卸直 ○印は貳拾五錢 ○印は貳拾八錢 ○印は四拾五錢 ×印は四拾五錢 ×印は五十錢 ×印は六十錢 送料は一冊六錢、三冊迄八錢、以上三冊毎に四錢増し但し内地限り 卸直目録は販賣又は貸本營業の方に限り郵券三錢送らるれば進呈す
□浪の音後編	□行き違ひ	□可憐の棄兒終編	
□浪の音終編	□行き違ひ後編	▼半井桃水著	
×迷ひ路	▼如鬼坊著	□賈造紙幣	
×迷ひ路後編	□鱗興之助	×慰問袋	
□もつれ髪	□乳守のお仙	×慰問袋後編	
□もつれ髪後編	□池沼鯉之助	▼雪鷲庵著	
×房江と小百合子	▼稻花生著	□怪談長者屋敷	
□思ひの家	□小車新三	□怪談後の長者屋敷	
□思ひの家後編	□後の小車	▼花冠者著	
□思ひの家終編	□金齒のお墨	□思はぬ戀	
▼嶋村抱月著	▼根本吐芳著	□思はぬ戀後編	
□其の女	□三人の仇	▼舟坊著	
▼夢郷庵著	□三人の仇後編	○喜劇十二番	
□女夫塚	▲匿名子著	▼大畑匡山著	
□女夫塚後編	□可憐の棄兒	○諸國珍談集	

▼神田伯龍講演	◎鬼 勝丸	◎齋藤 大八	◎桂川 力藏	◎復讐 松本春太郎	◎女 柳澤雪江	◎赤尾 林藏	◎高萩 伊之松	◎水府 大鳥平八郎	◎水府 小嶋長門	◎客 時鳥新藏	◎講談 想夫戀	◎人 大和龍子	◎客 村正勘次	◎客 業平金次	◎美 少年錄
◎後の美少年錄	◎其後の美少年錄	◎最後の美少年錄	▼玉田玉秀齋講演	◎武田家 眞田鬼彈正	◎保科 槍彈正	◎高阪 智惠彈正	◎駒形 鐵五郎	◎立花 彌五郎	◎鬼丸 花太郎	◎左文字 雪枝	◎藤堂家 大評定	◎阿漕 の 旗風	◎元和 中條兵庫之助	◎入間川 中條武勇傳	◎中條 兵庫族日記
◎奥羽後の中條	◎豪傑 方力丸弘行	◎豪傑 魔風軍藤太	◎緒方 黒姫山の旗揚	◎天保 浪花の大潮	◎天保 後の大潮	◎寛永 春日熊之丞	◎春日 宮嶋大仇討	◎六郷 縫之助	◎六郷 武勇傳	◎後 兒玉由利之助	◎野州 惡狐塚由來	◎庚申 惡狐退治	◎豪傑 松平康之助	◎豪傑 近藤 勇	
◎怪勇後の近藤	◎日本 鮫嶋武雄	◎後の鮫嶋武雄	◎天正 幽靈半之丞	◎天正 母里太衛	◎天正 飯田覺兵衛	◎天明 文珠九助	◎大久保 彦左衛門 曾漫遊	◎同 東海漫遊記	▼福亭羽衣講演	◎三傑 大力重太	◎同 忍術佐助	◎同 金崎英五郎	◎橋口 隼人	◎橋口 羽五郎	

▼神田伯山講演	□田沼 の 刃傷	▼玉龍亭一山講演	◎天明 三人男	◎山田 屋辰五郎	◎夕立 勘五郎	◎義侠の 書生 大井道實	◎不敵の 遊婦 兒嶋お春	◎可憐の 青年 小出仙太郎	▼秋月玉光講演	◎客 藥師の梅吉	◎同 後の藥師	◎同 其後の藥師	◎女 俠龍神お玉	◎女 俠後の龍神	◎俠客 唐獅銀治
▼旭堂南陵講演	◎豪傑 地井右衛門	◎同上 總六郎	◎同 大力半之助	◎戀の 犯罪 松平辰子	◎同 肩屋鐵五郎	◎海賊 船東天丸	◎東天 丸五良吉	◎俠客 劍の電次	◎同 甲州定五郎	◎同 墨田の夜嵐	◎同 最後の血櫻	◎天正 豪傑 加藤孫六嘉明	◎高倉 長衛	◎後 の 高倉	◎旗本 船越八郎
◎源 三位の松	◎善 悪 お 淺	◎赤格子 九郎兵衛	◎入若 大次郎	◎神崎 堤百人斬	◎韋駄 天大八	◎火車 軍次	◎甲府 仇討	▲崎 琴書講演	◎怪人 伊藤 夏子	▲東光 齋改 松月堂 榎林講演	◎三槍 本 佐分利左内	◎三槍 本 大嶋伴六	◎三槍 本 梅田奎之丞	▲石川 一口講演	◎尾 張傳内
◎淀屋 辰五郎	◎講談 幽靈の片袖	◎客 黒船忠右衛門	◎真葛ヶ 原仇討	◎南 奇聞 辨天 娘	◎講談 四千両	◎金藏 破り 犬塚富藏	◎怪力 無双 石原平四郎	◎復讐 美談 武内熊之助	◎傑 岩井善右衛門	◎岩井 肥後の仇討	◎客 鐵 網長吉	◎女 丸 尼崎りや女	◎勇 丸 龜大仇討	▲帆樓 白鷗講演	◎天狗 流譽の幻術

大好評新刊小説

安岡夢郷君作				
紫	洞窟の怪美人	女	薄	肖
組	組	塚	命	像
全二冊	全二冊	全二冊	全二冊	全三冊
<p>谷 洗馬君書 全二冊 子の獄 長谷川小信君書 全二冊 地獄の谷 洗馬君書 全三冊 肖像 山本英春君書 全二冊 命 歌川琥舟君書 全二冊 女 須藤宗方君書 全二冊 洞窟の怪美人 須藤宗方君書 全二冊 紫 須藤宗方君書 全二冊</p>				
<p>新聞小説家としての安岡夢郷君は、既に老巧の域に入る所道の先達である、此人の作は可なり多数ではあるが、就中『罪の子』と『地獄谷』とはその最も得意傑出の作であつて、これは哀艶凄惨なる悲劇的事實を極めて濕つぽく書いた情にも涙にも富んだシンミリとしたもの、肖像畫は此作者が最近苦心の作で、これは藝術に熱心な有爲の青年畫家と、温良可憐な名士の娘とを中心にして、これに心術の卑劣な陰險の畫家と、虚榮心の強い富豪の令嬢と、輕佻浮薄な青年文士とを點綴した頗る意味のある小説、薄命怨は妙齡の美人が父母には死なれ兄とは生別れ、誰を寄邊も渚の小舟浪と風とに弄ばる、可憐の態を描いた小説、いづれも新聞紙上で大好評のもの。</p>				
樋口隆文館發行				

<p>▼大阪大家競演</p> <p>※大阪浪花節大會</p> <p>※同 第二集</p> <p>▼東西大家競演</p> <p>※浪花節講演集</p> <p>※同 第二集</p> <p>▼浮世亭夢九講演</p> <p>◎浪花節勇士揃</p> <p>◎同 武勇競</p> <p>◎同 俠客揃</p> <p>▼大阪三友派講演</p> <p>◎三友落語集</p> <p>▼三遊亭金馬講演</p> <p>◎落語金馬集</p> <p>▼東西合併講演</p> <p>×落語講談大會</p>	<p>樋口隆文館 小説賣價表</p> <p>小賣 直 御直</p> <p>○印は貳拾五錢</p> <p>◎印は貳拾八錢</p> <p>□印は四拾錢</p> <p>×印は四拾五錢</p> <p> 印は五拾錢</p> <p>÷印は六拾錢</p> <p>※印は參拾錢</p> <p>花鳥畫書貳拾五錢</p> <p>小説の送料は一冊六錢三冊迄八錢以上三冊毎に四錢増し但し内地限り</p>	<p>此目錄に列記した書籍は、全部樋口隆文館の出版物でございます其全部が東京、京都、大阪其他全國各地の新聞又は雜誌等にて大好評を受けたものでございますからそれを御覽になりましても悉内容の充實した極評判の好い傑作良書の揃ひでございます、樋口隆文館ではまだ此他にも續々と新版を發行いたします、それは追々と發表することにいたします。</p>
---	--	---

中村兵衛君作

- 血染の手巾 全壹冊
- 妻の罪 全壹冊
- 二人の影 全壹冊
- 水月尼 全壹冊
- 月の輪 全壹冊
- 父無き子 全貳冊
- 甚九郎稻荷 全參冊
- 義侠の青年 全壹冊
- 狸心中 全壹冊

中村兵衛君の作は總じて一般向に面白く出来て居ます、中にも血染の手巾は探偵小説としては最も讀者に歡迎せられたもの、妻の罪とは知名なる某紳士の夫人が秘密に犯せし罪の物語で、月の輪と共に家庭向の好讀物、父なき子と二人の影とは青年に少女と藝妓とを絡ました此人の作中での悲劇物で、水月尼は一風變つた極めて剛快な女丈夫の傳記、甚九郎稻荷は備前岡山で有名な甚九郎稻荷の由來記であつて孤忠を懐いて數奇なる運命と戦ひし佐久間甚九郎の一代を叙したもので、狸心中は神戸に於ける事實談、いづれも各地の新聞で大好評を得し小説。

樋口隆文館發行

塚原澁柿氏著 小林古徑君畫

石堂兄弟

美本全一冊
正價金六十錢
郵税六錢

石堂兄弟の一篇、時代小説作家の泰斗たる澁柿先生が會心の傑作にして多涙多血なる劍俠二人は實に二美姬に戀せられたる勇士の双生兒也。然かも一言然諾を重んじ、遂に骨肉の親を以てして龍虎相ひ闘ふの悲壯劇を演ずるに至る、事件錯綜波瀾萬丈。蓋し近來の好著也。萬朝報は評して曰く……澁柿作中面白きもの、一にして何所やらが大コルネイユの悲劇「オラース」に髣髴たり……と本書を以て世界の大作に比せり、既に片々たる戀愛小説に倦みしの讀者は、去て此氣骨稜々たる剛俠小説を讀まれよ、

樋口隆文館發行

大評新刊小説

遲塚麗水氏著 井川洗厓氏畫

都新聞

小

黒

髪

上下二卷類美本
口繪艶麗無比
特價各六十錢
送料金八錢

遲塚麗水氏の筆、その如何に眞摯にして而も滑脱に、艶麗にして而も沈痛なるかは夙に世に知らる、黒髪の結ばれたる思ひをば、氏の筆に依つて始めて梳られ始めて解かる、を得べきなり。暑を湘南の別荘に避けたる一紳士が、亡き愛娘の靈を悼むべく張りたる小室に於て、ゆくりなく生み出されたる出来事は著者に依りて詩化せられ、滑稽悲愴千態萬狀の活劇は巧に描寫せられぬ、其滑稽なる幕は人をして抱腹絶倒せしめ、其悲惨なる齣は讀む者をして嗚咽涕泣せしむ。痛快なる哉小説『黒髪』!!之を讀まざる者は未だ共に小説を語るに足らず

樋口隆文館發行

大評新刊小説

小林蹴月氏著 伊藤靜雨氏畫

やまと新

小

灯

全二冊

口繪艶麗無比
前篇各特價六十錢宛
後篇各特價六十錢宛
郵税八錢

女にのろき幸野原子爵を經とし、奇智詐略に富める妖婦篠江を緯とし、そが織出せる幾多の悲劇を描寫して、之を彩るに臆病なる情夫、意思鞏固なる青年、を戀せる可憐の美婦を以てし、亂れたる華族の家庭は、艶麗なる著者の筆によつて遺憾なく眼前に展開せらる、本編の曩にやまと新聞に掲げらる、や、好評噴々として數十萬の讀者を狂喜せしめ、之を演劇に脚色し、之を活動寫眞に映じて、大方諸産の喝采を擡にしたるもの、其内容の穩健なるは以て家庭の讀物たるに適すべく、其裝幀の美麗なるは以て机上の飾りと爲すに足る。

樋口隆文館發行

大好评新刊小説

渡邊黙禪君作

- 怪の怪 全二冊 長谷川小信君書
- 紅蓮の炎 全二冊 須藤宗方君書
- 風流菩薩 全二冊 井川洗臣君書
- 七首藝者 全二冊 長谷川小信君書
- 女獅子 全三冊 川上恒茂君書
- 雪降る深山 全三冊 須藤宗方君書
- 鬼棍原 全三冊 長谷川小信君書
- 美人魔 全二冊 長谷川小信君書

渡邊黙禪君作

通俗小説の作家としての渡邊黙禪氏の盛名は、現代の第一流として既に中外に認識せられて居ます。渡邊黙禪氏の作には、此人獨特の一種の妙味が有りますので、それで多數者に愛好せられるのであります。鮮に發揮せられて居る代表的佳作であります。序に黙禪氏の作で樋口隆文館で出版して居る總表題を左に御紹介致します、いづれも面白いものです。

樋口隆文館發行

大好评新刊小説

嶋川七石君作

- 亂れ髪 全三冊 山本英春君書
- 戀の横綱 全二冊 八幡白帆君書
- 密航婦 全二冊 山本英春君書
- つきぬ縁 全三冊 須藤宗方君書
- 胸の火 全二冊 森田久君 山本英春君書
- 落し胤 全二冊 歌川珠舟君書
- 憐なる雪子 全二冊 山本英春君書
- 戀のしがらみ 全三冊

嶋川七石君作

新聞小説家としての嶋川七石君の技倆は、既に一般に認識されて居ること、思ひます。嶋川七石君の作は可なり澤山に出来て居ますが、中にもわけて心血を凝がれた代表的の佳編は、實に上掲の各編でありまして、そのいづれもが新聞に演劇に讀者に看客に各大なる印象を與へ得た成功の作です。序に樋口隆文館で出来ました嶋川七石君の作を左に御紹介いたします。いづれも好評をもつて讀まれたつ、あるものです。

樋口隆文館發行

大評新刊

淚香小史 君合譯 鈴木錦泉君畫

探偵 美人の獄

口繪精巧コロタイプ 改正 實價 五十錢 送料 六錢

英國に於て、否、英國に於てのみならず、一時全歐維巴上下の人心に、痛烈深甚の大衝動を興へしは、この「美人の獄」と呼ばれたる一大疑獄事件である、その妙齡なる絶世の美人が、其の良人を毒殺せしといふに於ても、其事たるや甚怪む可く、其情や實に可憐の極みにて、痛ましや薄命の佳人は、露だに厭ふ屏弱の身に、ゆめ覺え無き濡衣を着て、幾春秋を悲雨慘風、月花もなき此世の外と、人の恐る、囹圄の裡に、犯さぬ罪を泣き暮して居た、噫、可憐この冤狂の婦、不可思議なる此疑獄の犯人、眞の罪人はそも何者ぞや、これ永久人智に不可解の謎か、否、否、天網恢恢疎なるも洩さず、難解の謎も或る機会に於て解かれ無事十年繫獄の美婦をして、再び青天白日の人とならしめた、此哀慘なる事實を寫すに、譯文に獨特の靈腕を有せらる、涙香丸亭兩先生の筆を以てす、實に本編は怪奇を極めたる探偵小説にして、また凄艶なる悲劇小説を兼ねたるもの、乞ふ愛讀せられんことを。

樋口隆文館發行

大評新刊小

鹿嶋櫻巷君作 谷洗馬君畫

戀の敗者

全二冊

實價各四拾五錢 送料二冊八錢

戀の勝利者たるには如何なる武器が必要か、戀の敗者には如何なる缺點が有りしか、成功と失敗の分岐點は何、この謎を解釋して俗語子の曰く「惚れ薬に何が好かるぞ、蝶蠟に問へば現代ちや僕より佐渡の土」語は簡であるが意味は深長である、黄金の光に眩惑せられて其情操を二三にせし女は豈に金色夜叉の宮のみならんや、本編は慾望の爲にその愛を棄し虚榮の女と金力の爲にその戀を奪はれし失戀の男との心理の苦痛と煩悶とを巧に描寫した櫻巷君の傑作、

嶋村抱月君譯 密書挿入

其の女

全一冊

定價五拾五錢 送料六錢

原作者の序に曰く、我友の曰く「けれどもまさか其んな事を斷行する女は無からう」われの曰く「ところが斷行した女を僕が知つて居るのだ、是れがすなはち其の女の物語さ」……とある、ツマリ本書は極めて大膽なる自由結婚若くは自由戀愛の主張を寓した小説である。

樋口隆文館發行

大好評新刊小説

山田松琴君作

- 残り草 全三冊 山本英春君書
- 腹ちぢひ 全三冊 須藤宗方君書
- 操くらべ 全二冊 歌川珠舟君書 川上恒茂君書
- 思ひの家 全三冊 山本英春君書
- ゆめのあと 全三冊 八幡白帆君書
- うすき縁 全二冊 歌川珠舟君書
- 知らぬ親 全二冊 須藤宗方君書
- 迷ひ路 全二冊 山本英春君書

山田松琴君の作は、そのすべてが情と涙に富んだ悲劇小説であつて、男女の両方に好かれるやうに面白く出来て居ます、中にも上記の各編は著者が最も心血を凝らした苦心の作であつて、新聞に演劇に活動寫真に各大喝采を博した成功の作でございますから、その中のいづれを讀まれたましても面白い事は御受合いたします。序に此作者の著作總題を左に御紹介いたします

山田松琴君作

- 人江と小百合子 全三冊 浪の音 全三冊
- 房江と小百合子 全二冊 もつれ髪 全二冊
- 残り草 全三冊 腹ちぢひ 全三冊
- 操くらべ 全二冊 思ひの家 全三冊
- ゆめのあと 全三冊 うすき縁 全三冊
- 知らぬ親 全二冊 迷ひ路 全二冊

樋口隆文館發行

大好評新刊小説

嶋川七石君作 八幡白帆君書

悲哀小説 罪

全二冊 美術木版口繪挿入 各一冊實價五拾錢宛 送料二冊ニ付金八錢

奇怪なる犯罪事件である。帝都劇壇の花とた、へられし、佳麗妙齡なる一女優の手によつて世にも恐るべき殺人の大罪が犯されんとした、其裏面には、必ず何か隠れたる大なる秘密が在らねばならぬ。そも犯罪の動機は何、戀か、嫉妬か、否戀にあらず、嫉妬にもあらず、其處に讀者に同情の涙を濺かしむる悲痛にして凄慘、而て愛情の美しき物語があるのだ。

樋口隆文館發行